



半閑窓談

曲亭馬琴

全

~21
4265



121
4265

不谷如庫

<91-910c>

703



半休定待(二行)

明の鷹岩山樵の水滸後傳ははしめおのれこの書ある
 ことをしらす享和二年の夏のこと京浪速と遊歴せし
 日尾張名護屋の旅亭にてあふ人の藏たるをゆくり
 もなく関しにきいとめつらしく思ひしかは回目さの
 み抄録しこも遺忘に備へたりかて浪速に赴きて
 あふ日馬田老人と長崎の昌調ものかたらし言の
 ついでにこの書のこと及ひしに馬田老人のいひけ
 るやうは水滸後傳に二本ありその一本は天花翁の作
 也やつかり故郷にありし時二本ながら見きとて誇れ
 知書りて京左にはなす書肆をおちなくあきりてそ

圖書刊行

の書名たも知れずは稀にてふた、ひ見るとよしなかりけり是より二十餘年を経て文政十年の春に也あり
 中ん吾友伊勢松坂友ととの屋敷に殿村氏浪速にた
 ひぬしたの折かの鴉居山樵か水滸後傳を購得てけり
 いたくふりたる本なりければ印字に磨滅少からず且
 破裂して全からざる巻々も有けるを京の儒生山脇翁
 の藏に善本ありと聞えしかは醫師秋田ぬしを以と
 して借得て校讐補寫せしめ、とひら毎にうらちうた
 せてふるき唐紙の脆きを修復しさらに製本せられし
 かは遂に全書となりしとぞ、とのやぬし披閱の後い

んはくもななく郵附して解に見よとておこされたり實
 に好みをあなしうすなふ交遊の情義をおもへは得し
 てはつちにあへるに似たるわかよろこひしりぬ一し
 とかへする程にりぬる己丑のとし水滸後傳舶來しつ
 去年む月のなかはに至りてこ、にも芝及る堂古堂に
 その書ありと聞えしかはとく購得はとて人もて來
 めにつかはせしにみな賣果てなしといひしを浪速の
 書肆よりよひとりしてふみ月なかはに購得たれば價
 もいたくのほりにけるやかて繕きて覽せしにその書
 は清の乾隆のとし三針蔡昊といふもの、再評翻刻し

つゝに誤字謬刻多し無下の要本なりけれとも
幸ひにこそ、の屋敷しのかされし原本あるをも
校訂せしむ思ふものから例の著述にいとなく得た
たさ、りけるをことし彌生9下旬よりいはらく著書
の筆をと、めて夜も日も校訂点裁しつ、卯月六日に
校し果にきかんとて序の原本をぬしに返さんと欲する
にありそめなから三とせを経たりもくにすへきも
の、友けれはいさ、か悪評をしるしつけてしめして
笑を取れりのみかの馬田氏の見きとひひつゝ天花翁
の水滸後傳はいかなるよしをつゝりにけんとし来

人にたつぬしあともそを藏 せし人のありとしも聞
えぬは友は夢にたも見よによしなし 天花翁は稗史の
作ありなれともさせし佳作はあらす、その著せし後傳
の、から國にも今あり、なし、問まなくほしきもの、そ
有ける、

天保二年辛卯の夏四月七日 著作堂主人燈下識

三好アキ

水滸後傳批評半覽窓談
水滸後傳八卷 章訂本は厘に回目四十回每卷著して古
宋遺民著 雁宕山樵評とあり 明の萬曆戊申の秋 或申六
年也 天朝慶長十 雁宕山樵か自序並に古宋遺民の偽序
三年に下れり 其に二編あり 然るを清の蔡昊か再評翻刻の新本には
件の二序を削去りて 自己の序をのみ附載たれは 是より
原本開鑿の歲月竟に氓滅して 世に傳りすなり ぬべ
しいと惜むべきことに ありす也 且蔡昊か章訂本には
件の雁宕山樵か自評と 鰲頭評を削去りて 其の卷毎に 銘
署して 古宋遺民 雁宕山樵 編輯 金陵 慈容 野雲 主人 評定

水滸後傳批評半覽窓談

水滸後傳八卷 章訂本は厘に回目四十回每卷著して古

宋遺民著 雁宕山樵評とあり 明の萬曆戊申の秋 或申六

年也 天朝慶長十 雁宕山樵か自序並に古宋遺民の偽序

三年に下れり 其に二編あり 然るを清の蔡昊か再評翻刻の新本には

件の二序を削去りて 自己の序をのみ附載たれは 是より

原本開鑿の歲月竟に氓滅して 世に傳りすなり ぬべ

しいと惜むべきことに ありす也 且蔡昊か章訂本には

件の雁宕山樵か自評と 鰲頭評を削去りて 其の卷毎に 銘

署して 古宋遺民 雁宕山樵 編輯 金陵 慈容 野雲 主人 評定

水滸後傳批評半覽窓談

水滸後傳批評半覽窓談

水滸後傳批評半覽窓談

とあり蔡旻字元放古宋遺民は偽稱なりこの書は鴈宕
 山樵が自作なるを疑ふなりしをいかにしてしるすと
 りは第三十五の回目日本國興兵構勢といふ段と
 關白一萬の兵を率て暹羅國なる李俊等と戦ふ事あり
 この關白は豊太閤の朝鮮攻より唐山にて傳聞たる冠
 位なりんは宋元の時にかして日本國の元帥の關白
 なりしことを知りべきこれをもて推量ふと古宋の
 遺民は偽稱なりと明板原本の簡端の総評は遺民不知
 何許人以時考之當去施羅之世未遠或與之同時不相為
 下亦未知知元人以填詞小說為事當時の風氣如此とい

へりこの評の落款に樵餘偶識とあり則是鴈宕山樵か
 自評也樵は鴈宕からんに存る文人どものよろづに
 偽り多きこれにしも限るにありぬと前傳に金瑞か施
 耐庵の序を偽作したる舊稿に依ひたりん縱その國
 の人を欺き得たりともいかにして皇國人を欺き得ん
 らばかりのそら言は三尺の童子もしるべし蔡旻か重
 訂本にこの総評を削り去りしはこゝろあるに似たれ
 とも遺民と山樵を雷同して古宋遺民鴈宕山樵編輯と
 してせしは五十歩をもて百歩を笑ふといふことわざ
 にも似たりけり遺民は是山樵が人を欺く偽稱なれど

も萬曆中の人なれば宋元を相去ること既にしといと
遠かりこれ古宋の遺民といは、三百許歳の翁なると
へし、こも笑ふべきことにありや、評一

この水滸後傳の大意は、混江龍李俊が暹羅國へ推渡り
て、かしこの逆臣共、壽薩頭陀を討滅して、我にて國王に
なりし時、天罡地煞、残剩の三十餘人、良佐となりて俱に
さりへしよしを作れり、これにより、初めか思ひしは李
俊が暹羅の王になりしと、いふ物かたりは、慶長の年
山田仁左衛門が暹羅に赴きて重任せられ、遂に大國を
領せしこと、の事見えたり、當時唐山にも聞えにけん

唐山の商販常は暹羅に到りて逗留し、こを撮合し
貿易を事とし、いふ今もなほし、か
て後傳に云々と作りしなりんと、は、こも心つきしか
は、いさ、か物にもしるせしを、又つらくおもひ
るにかの山田仁左衛門が暹羅王に重用せられ、大國
を領せしは、天朝寛永十年のころ也、又山樵が水滸後傳
を作りしは、明の萬曆三十六年の秋なり、ければ、天朝慶
長十三年に丁れり、このころ既に左衛門は暹羅に赴
きたりといふとも、か水が重任せられしは、寛永中のこ
となれば、その水滸後傳に撮合せしは、ありざる也、し
かれば、とも古宋遺民の偽稱の如く、件の鴈宕山樵も明人

にはありずして清の康熙の年友とに作り出したリけ
るをふりあかさんとて萬曆中の著書にしたりも知る
べかりずと疑ひ思ひしこともありしを今又おもへば
さにありず後傳の原本は筆工の書体彫刻の精妙なる
またく是明板にてこれを乾隆の重計本に比れば實に
雲壤の差別あり當今細工の疎陋にたりしは和漢一般
の時勢に由れり仕入本と唱ふものにはよみ得かたき
も多しありこの原本は珍書也序目と評は寫させ置に
き異日又同好の友に見せばやと思へば也 評二
後傳の作者の大意は前傳なる百八人の好漢等忠義の

志ありしうして終りをよむせしものもなきを看官飽
ぬ心地すなればその残燼を引起してかたのこと人に
作りたりことわりあるに似たれども天國地然り好漢
等おすして終をよんせたりしは前傳作者の本意也二
の辨論は下にしるさん縦見る人々の心をこころよく
せんとしてその残燼を引起す後傳の作ありとも李俊
をもて總大将と作りなせしはわかれにせよこの故にさ
の女の畧評に李俊は宋江に孝順厚かりたりしもの
也とればこそ遼國を征伐の折は之を隱遁の志ありて
費保等と竊に約束せしが果して方臘を討ちし後宋江

に別を告て彼范蠡が五湖に倣へりこの心術を推すと
きは李俊は宋江の死友にあらずさうを暹羅の國王に
して自餘の三十一人をその臣下にたしだすは快らぬ
作りさま也彼國王になすべきものは柴進などこそふ
さはしからぬこの人オ略なげれども周の天子の後裔
にて當時貴族と稱せり只このことのみなりて客を
受てて賦を惜まず林冲武松宋江等々はみな友その陰
に寄て危難を免れし事にもあればと郵書の内にいひ
あこされたり李俊がことの論辯は素より是悪意と暗
合せり惟その氏族の尊卑によりて云々といはれしは

別皇國こゝろにて墨邦のうへには干からず柴進は暹
羅にて宰相になりたれば後傳の作者も亦その用の
心なきにありずこの義を悪意に任ずれば暹羅の王に
なすべきもの本傳に三人ありその第一は宋安平是友
りこの安平は宋靖の子宋江の姪也吾その傳を立てこ
とありははじめに必いふべきことあり宋江生涯娶り
されは嗣のありたること勿論也弟宋靖は兩個の兒子
あり冢子を宋安平といひその次を某とといふ宋江世
にありし時父宋太公の願ひによりて宋安平を養嗣と
すとは宋江の本意ならぬとも父の情願するによし

なく且後なきを不孝とすといふ經文もあるなれば遂
 にその意に任せしなといふ趣に綴りなしてさて安平
 か人となり文武両なり才たけて竟に豊邦の君に友
 るべき徳あるものに作りなせば彼奸臣に藥鴆せられ
 て半世の忠義画餅となりにし宋江か處に冤を伸る是
 一大奇段にて看官拍掌喚呼すべき和漢一致の快事友
 りんを後傳の作者この義を思はず刺宋安平を文弱無
 用の人にしたるはこゝろ得かたきこととこそおれ吳兼
 加評に宋安平を無用の人せといひし前傳に宋江は文
 弱の諸生にして可もなしく又不可もなしこれらは作者の

用心にて宋江をさしく才あり徳あり百八人の頭領た
 れば盈るを虧て宋清をかたのごとくに作りなせしか
 すなはち事の且じき也後傳に至りては宋清の子なり
 と也才子俊傑なかりん也譬は鐵叫子梁和のごときそ
 の性伶俐也といへども前傳にはさせる能なしとるを
 後傳に至りては智畧異用と仰伸すこの義を以推すと
 きは宋清も亦後傳には一廉の役を着けてその子宋安
 平を右のごとく暹羅の王になすとも前傳と齟齬す
 べきにありす作りさすにことにもか人にもなせば友
 すべきことなると後傳の作者いかにむね李俊にの

み厚味にて宋江兄弟に薄かりしは、病世あやこき趣向也。知らず僻言なりんかも評三。
又その次は暹羅國の王に存すこきもの花逢春しかるべし。他は少李廣化榮の子也。花榮は弓箭の達人にて原是宋の知寨也。已こを待はず梁山泊に落草したるものなりともみつかかり旅客を起聲して物をとりたることも聞えず。行状すべて愛敬ありて看官に嬉しがらる。その子花逢春も亦家業を承嗣きて射藝に妙あり。暹羅の公主に眷戀せり。此は、久く騎馬にたりしかば、李俊は此れを媒鳥にこして竟て大業をなせし也。かの時李俊か

よく譲りて花逢春を王にせは暹羅王の血統たすこ

並に情不用心は、花逢春の娘に嫁せし。花逢春の娘は、花逢春の血統たすこ
花逢春の娘は、花逢春の血統たすこ
花逢春の娘は、花逢春の血統たすこ
花逢春の娘は、花逢春の血統たすこ

したるは世に寡立を旨とすなる是漢こ、その致す可
より見つてまと魂に稱ふべくもあらすかし評四

此行

み厚くして宋江兄弟に薄かりしは病世ありき趣向
 也知らず僻言なりんかも評三
 又その次は暹羅國の王に存すきもの花逢春しかる
 べし他は少李種化宋の子也花榮は弓箭の達人にて原
 是宋の知寨也已ことを得ず梁山泊に落草したるもの
 なるともみづかり旅客を趕脅して物をとりたること
 も聞えず行状すべて愛敬ありて看官に嬉しがらるる
 の子花逢春も亦家業を承嗣ぎて射藝に妙あり暹羅の
 公主に眷戀せられはよく駙馬にたりしかは李俊は
 かれを媒鳥にして竟に大業をなせし也かの時李俊か

よく譲りて花逢春を王にせは暹羅王の血統たらずこ
 此らの行ふ宋江の本意に稱ふ好しもあるは李俊はい
 よく大義士にてみづかり王にたると勝れり勿論暹
 羅の物かたりはその王馬審真の爲にせ本李俊等三十
 餘人の爲に作り設けしことなるはとも馬審真は後漢の
 名將馬援が後裔なるよしなるはその婿花逢春に王位
 を嗣して李俊等良佐となることも恥かしきことなるか
 らべし後傳の作者この義をたもはず李俊をもて王に
 したるは世に纂立を肯とすなる是漢こ、その致す所
 くら見つてまとい魂に稱ふべくもあらずかし評四

此行
 〇

向 原 子 の 是 け け

こ い 道 十 の 位 け け 所

又云前傳に宋江毒殺せられし後夜宋は兵用と俱に其
墓上に^弔哭して終に縊れ死したるは宋江によく弟兄
たるもの誰かこれに及ぶ一きわぬはその子花逢春
を暹羅国の王にせば前世の果報おなじからずこの義
によりは兵用にも怪何かしとらふものありて他郷に
ありしよれを作りて後傳残餘の好漢と共に後榮ある
べきものにありずや 評四

既に上におけつろいたる宋安平も花逢春も暹羅王に
なすに嫌ひあらは浪子燕青しかるべし燕青はいはて
もしもき盧俊義の家僕にて出処賤しかりけれどもそ
の忠義拔群也且その智慧の廣大なるも兵用か如き奸
計を行はず呉用か林冲は嗚呼をかふて王偏を殺さ
前傳には李柳口に便りて徽宗帝に咫尺して招安の御
書を賜り遂に呼保義宋江が府願を果させしその功も
并拔群也又後傳には全營上起きて徽宗帝に朝見して
柑子青子をたてまつり御筆の便面を賜はりいは人の
及はぬ所にしてこれには誠志尤けきもの也又此の

ことのみならずよく十金を調達して國匪の内に盧安
人母女を贖ひ得たりける仲々事々ひとつとして忠義
に本づかさるはなし三十二名残餘の好漢孰か燕青に
及ぶべきかこれにの後傳に燕青も暹羅國の王
トなすともけうはあらずかんと人の意表に出る
作りぞましくらもあふべし後傳の作者これらの意味
に心つかぬふあらぬ暹羅國の位階の段に燕青は
第三位榮進階孫勝第二階宰相にあり李俊上勝凡
ふよしを知れども李俊は機を見え禍を避たることの
いちはやく且梁山泊にあつしとき水軍一二の頭領な

水滸遂に異國へ推渡る總大将トト立て羅羅國に赴
きしも衆兄弟に先だ、也その先人の功をもて其状の
王にたしたる也評五

蔡昊の總評の第四に云く本傳雖是承接前傳而作然
有勝於前傳如前傳所寫殺人之事固有當其罪者亦有
無辜枉死令人可憐者如秦明之家眷有官寺之老僧雖非
手又然正如王導所云我雖不殺伯仁由我而死用事
者不得辭其過也又如危家庄已是通和危成又將祝彪解
束却將他全家殺死至于朱仝之小衙內更是可憐又如魯
達之在李忠寨內擄而逃石秀之燒燒祝家庄但為不滿人

意本傳為所殺人或是害民或誤國為公儀所不容其小者
亦是與山泊諸人不是舊仇即是新眼素懷怨隙明作對頭
日俱各有應死之處揆之天理人情必須殺人而後快者這
亦殺得并無遺憾方是真豪傑舉動不是殘毒不是孟浪比
前傳為更強也といへり理りあるに似たりともこれら
は水滸の皮肉を見ていまだ骨髄をしらざるもの也抑
水滸傳に三等の深意あり宋江をばいめとして百人名
の好漢等初各生出てその身くト事あるまてはみな存
一般の善人なり既に事あるに及びて梁山泊に落草也
しもの文弱なるも奸智殘忍勇悍なるは不仁暴行一箇

も悪魔に似ざるはなし至便是石碣魔君を走らせし至應報
 に縁るものにして宋江といふといふとも魔行なきこ
 とを得ざる也又かの稽天行道なといふとは皆是魔
 心の誇言也必しも信すべからずかゝて石碣天降りて
 か北らか過世の業因を料らす鮮脱せしに於りその面
 面を改めて忠臣義士となれる也か、北は一百八人に
 初善中惡後忠の三筆あり此ころを得て水滸を見さ
 れは作者の深意分明なり受るものもいまは悟らす
 識るものはいよ／＼く悟るかの金瑞すら醒すして漫
 に水滸を評せしかは當らざることいと多かり又只金

瑞蔡吳等加この三筆あるよしを悟ら就批評せしのみ
 ならず後傳の作者も亦無明の醉の醒さりけりそをい
 かにむと推しても見よ前傳に寫せし斬石碣猛可ト天
 降りて魔君を降伏したるにより宋江等百八人清淨無
 垢の勇士になりて宋朝の爲に死をだも辞せず俱に忠
 義を盡したり後人後傳を作るに及び先よこの義
 を會得れば活残りたる三十二人の好漢等も亦同前に
 不臣の心を起すことなくさてあるべきにいかにも之
 登雲飲馬山川ニヶ所ト又山寨を相搦へて強盜トなり
 しそかうへに又官軍を撃退けて勉て宋朝に首を突き

夫ふ、此らの趣向は前傳の真面目を抹却して、蛇足の
 爲に画くに似たるを、蔡美の評定に、これを前傳に勝ると
 いふは、よと思はざる証言也。李應孫立阮小七等黨を
 結ぶ夥を聚めて、ふた、公賊の頭領になりながら、罪も
 怒もなきものを殺さて物をのみとりんといと嗚呼か
 ましきことにはあると、前傳一百八人に、初善中惡後忠
 の三等あるを發明せしは、只是愚者の一得にて、古人未
 發の明評なりすや、羅貫耐奔なはなかり一て皇國に東
 つることありとも、わが言にこそ、從はめか、此は那
 金瑞の石碣妖を闡くに始り、石碣妖を収るに終るとい

いしも、評説にて七十回は全書にあり、又宋江等前傳
 に、死するもの四十許人、竟に後榮あることなく、みな奸
 臣に陥れられて、果敢なく枉死したりしは、中ころ魔行
 の惡報にて、亦是勸善懲惡の作者の用意こ、トあり、宋
 江等百八人、忠義を盡して、賞を得ず、過半王事に死した
 ればこそ、舊惡竟に消滅して、忠信義烈、虚名にたりず、世
 々看官に惜まる、か前傳作者の本意也、先よ、この意
 を會得して、さて後傳を作ふ、一と前後の評を評す、一し
 評六
 ある人、この批評を見て、予にいひ、ゆるやう、翁日評論と

しといへともさこは腐儒の迂談に似たり宋江等百八
 人忠義を旨としこ賞を得ず過半枉死せしをもこよく
 勸懲を正しこしたるか前傳作者の本意なりは蔡京童
 貫高俅等の奸臣も必みな誅せられこ俱こ勸懲を正し
 こすべししかるを前傳にそのことなきはいわにむや
 こをもて後傳に奸臣すべこ誦罰せられ早蔡京童貫
 高俅等は梁山殘餘の好漢等こ葉燭せられこ非命に死
 にき便是前後の傳の舊惡を報ふ大趣向かここを勸
 懲に遺漏なきといふべし梁山一百八人にのみその
 舊惡の應報ありこ那奸臣等こそのことなきは便是前

傳の作者の脱落といはまくのみにかここも深意ありと
 と問ふににおのれ答ていひゆるやう元水滸の皮肉を
 のみ見つるものは足下に限らずさる疑ひは人みなあ
 るべし抑蔡京童貫高俅楊戩等の奸臣は皆是宋書に載
 られこ榮枯賞罰分明存るを讀書の人はみなよくし水
 りこをもて前傳に他等かここしく罪せられし趣ま
 こは寫さぬ也水滸は素より宋朝の奸臣の爲に作りす
 百八人の好漢等の列傳なれば勸懲も百八人のうへに
 あり彼蔡京高俅も竟に終りをよくせざりし高俅は徽
 ととき沙漢へ移きたるよしその事の趣は宋史に譲りて
 宋元通鑑に見えたり

寫さぬが^至廻作者の俗ならざ^る亦是一大趣向也今此間
 の草紙の如くをくく婦幼に見せんとして作りおし
 を會得せばそこ^の疑ひ氷解すべしとせば此又後傳に
 那^ハ奸臣等が諷刺の趣をよく寫して人意を快くせしは
 書を讀む人の存在れば此も亦あしかりぬと前傳と
 後傳は作者の腹内からうへに合さることのいと多
 わりこの故に後傳は前傳に本つきて遣たふを捨公足
 りさうを補ふ趣向を承接に似たれども水に油をま
 じへ^も如く用心すべ^てかなしかりずとをいかにせと
 おもひみれば初善中惡後忠の三等あるをしらざる故

也か、此は山樵か後傳は、又は一書と見ることよけれ
 こを前傳と兄弟になさまくすと心得にかりず用心各
 異なれば也評也
 ある人又いふ翁が評解寔によししかれば飲馬川へ
 向られたる一隊の軍兵は只童貫の指揮に由りか、
 此は官軍と稱するは名のみにて且討^手平の大將たる李
 良嗣郭景は無類の小人也李應等と此と戦ふと撃走り
 せたりとも天子に盾を突くにありすこの義はわか
 くと向れしにおのれ又答けるやう飲馬へ討手の軍兵
 け童貫の指揮によるとも他兵權を掌りて天子に奏聞

免評を歴てうち向付せたる討手にあはれは、咎れを免
 る、所存しそはとまれかくなれ、李應等飲馬の山寨に
 黨を結ぶ夥を聚て又強盜にたりし趣向は、おの後忠の
 義に稱はす、只後傳を一書として見るときは、さてもお
 り存んよ、前傳の意を接ぎて作れりものとは思はず
 とは勸懲の第一義、糾きすはあよ一かりず、予がうけさ
 るはこのゆゑなり、評八、
 自是之下、後回、目次、評解、之、
 つらく後傳の趣向を思惟るに、作者の意、正、六、管、に、よ
 り、前傳と照應して、約束あるを、大かへじとおもふに、よ
 りて、悉くかの舊稿に、倣ひし也、こゝをもて、第一回の開

手には、梁山の頭存る石碣材を作り出して、石碣妖を、開
 くと、いふ前傳開手の面影を、寫したりかた、と、阮小七、
 が難を、避ゆ、母に、候して、亡命せしは、前傳王進之故態に
 倣へり、これら、は既に、蔡旻が、評中に見えたれは、今悉く
 擧るに、及はす、是より、危成を、引出し、又、欒廷玉を、引出し
 て、梁山、殘餘の、隊に、入れしは、おもむけ、あると、似たりと
 も、石碣、妖を、收めしより、宋江、等、百人、宋の、忠臣に、たり
 たり、たれは、石碣の、終始、禍福は、前傳と、事果、た、りしか、よ、を
 又、後傳に、石碣、村の、地名を、出して、前傳開手の、面影を、
 のめ、か、せし、は、その、意、た、か、へり、且、危成、欒廷玉、は、必、これ

後傳にありはす一きものなれども是を梁山殘剩の隊
 に入れしはこゝろよかりす成は既に前傳に宋江等
 と和順す且祝彪を生捕束つるに李逵の疎忽より事起
 りてその親を殺されたりか、此は後傳に至りても梁
 山殘餘の諸人の夥多に入らぬを宜しとす一し又欒廷玉
 は始より祝家兄弟の武藝の師にて股肱腹心と頼れた
 り前傳にこれ而降して梁山一方の頭領にせざりしを
 作者の腹内を推量しに祝家は年来梁山泊の好漢等と
 怨深なり前傳の作者この義をおもふて梁山泊の夥多に
 入れずゆくへ不定に寫カキ做ナシしたり東江かどの武藝を養

こゝと惜みしは虚稱のナ誠に景慕せざりしよしは
 扈家の和順をうち破りてその家眷を殺戮したる李逵
 を罪せざるにこそ知るべしわ、此は又後傳に欒廷玉を
 ありはすともこの兩人はいつまでも梁山殘餘の好漢
 等を怨みて和順せざるをよしとす官職を受宋に事へ
 て屢金軍と戦て後竟に陣没し子孫なは宋に仕へて家
 聲を墮おとしすたなとありは孝義兩方から全らしこおのづ
 かり感ふかく扈三娘が遺臭トに做ナシして梁山殘餘の隊に
 入るより遙に優こめでたかよ一し是すら前傳作者の
 本意に稱ふべからぬ筋なると百八人の外なりける欒

延玉を登雲山の山寨の玉將にして孫立孫新阮小七等
の諸頭領を阿容々々と他が手下に属たすは快らぬ
さま也。縦築延玉は武藝に長て万夫不當の勇士なりと
も天罡地煞の外人也。後傳は人勇て必隊に入ると
も天罡地煞の下にあつてさるを星外の人をもて登
雲山の玉將にしたるは前傳の意といたく差ひて甘心
しかたき趣向也。蔡昊はこれらのよしに些もいふこと
なかりしは何とか見けんこゝろ得かたしおもふに他
か後傳の批評はその書を誉ん爲て賣り物には筆を
飾るといふ世話にいとさき方便ありさるに上より原本

を引直して文を易たる処には贅詞を繁くして妙々々
々と書たふとたりあり。これらは自撰自賞存をせしり
さるものは欺れもせぬ。原本後刻相照して見るとあり
りとは思はず也。由断のなりぬ漢こゝろかたはらいた
きことにさうける評九
前傳地煞童婦の内後傳まで残りしものは願大嫂一人
也。この童婦は第二回に孫新羅潤阮小七等とにも扈
成か爲にも牙を撃てす処に出されしのみ別件の人か
、と共俱に登雲山の寨にありしのみにして又さる
こともなし。最後第四十回に至りて軍中妻子なきもの

一、存に嫁娶の合ありしとき、櫻揮の役に宛られたるもの
 也。又鬼臉児杜興は第四回に、孫立に頼れ、樂和上書
 簡を届けんとて、東京へ赴きて、囚れ、獄に繋れ、さて彰
 徳府へ配~~刺~~せられし時、楊林と相共に、馮舎人并に淫婦
 玉娥を殺し、逃去て、東人李應に隨從して、登雲山の夥に
 入りしより、後その名をだも出さず、最後暹羅國の功
 臣位階の段に、杜興は公孫勝より、下第四十位にありて、
 驛傳俱兼都統制武毅將軍と見えたるのみ、抑後傳殘刺
 の好漢三十二人、婦人^は也、これ^は前傳百八人に比れ、は多
 しとせず、扈大嫂杜興等は、前傳にて看官によく知られ

たるものなれば、後傳にても後々まで、むらなく役をつ
 くらんとよけれ、すべ^は後傳の作者の寫さるを思惟す
 に、三十餘人の好漢等に、幸不幸あり、もし雜劇の俳優友
 りは、必役不足をいふものあらん、可々^評十
 はじめ玉娥が杜興に情を寄せ、事成らざりしは、潘金
 蓮の故態を寫せし也、かゝる杜興が玉娥と馮舎人を殺
 す段は、林冲の草料場と、武松が嫂を殺して、兄の爲に怨
 を盡めたる、舊稿を寫せし也、毎回事々物々かゝる如く
 前傳の故態を寫して、相似て同じかりざるを、蔡昊が評
 したるは、めしは、を賣けたる飾辭なり、さすかに趣

向なきことありぬど、尚前傳の塚を離れ、新奇を出す
 にますことなし、こゝにいとあかしきことあり、杜興が
 綽髯を鬼臉見といへり、鬼臉見はこの間の俗の不見を
 推すに、左右たゞ中指をもて口を推廣せ、又食指をもて
 眼を推さず、開きて、へかこるといふことをすなると相
 同じ、鬼臉見のことは、檜園第十五卷妖魅ノ一に見え、大
 り、杜興が相貌べかこりに似たれば、さる綽髯を真せし
 なりんよしや、玉娥は淫婦なりともかゝる醜郎に着想
 せしは、事の缺たる戀にありずや、いとをかしついでに
 又ひとつ二ツのいはん、前傳に、既小五か綽髯を短命二夏

といへり、この短命を字の如くに讀ては、すめぬこと也
 綽いかたなるもの也とも、命短しといふ綽髯を真され
 ば、忌て必怒るべし、この短命は命の短き義にあり、あこ
 水を此間の俗語に譯せば、命とりめといふに同じ、今も
 美婦のえもいはれぬを譽て命とりめといふにこしる
 べし、短命の譯は、水滸解トも見えたり、この綽髯に、杜
 興が醜郎なり、既小五か殺生好なるを想像すべし、又既
 小二か綽髯を立地太歳といふ、この太歳は、歳徳星君の
 大歳方にあらす、唐山にて太歳と名つけたる、一種の怪
 物あり、その大サ斗のひとくに、肉毛あり、田間などの

土中にあゝを^入しりすして掘起せば蠕々として動く
といへり人もしこれを知れば立地に崇^ある棲霞の林
某といふもの件の太歳を掘出しして烹て啖んとして立
地に死したるよし秋燈叢話卷之四に見えたり阮小二
が粗暴なる譬はこの太歳の如く人もし是を知れば立
地に崇^あるといふ義を取て立地太歳と綽^あ稱せし也し
の餘も百八人の綽^あ稱に愚考あるもこゝに干^あからぬ
ことなれば贅^あ也すとは又別にしるすし評十一
混世魔王樊瑞の事の錯誤より公孫勝を引出せし趣向
は巧にてもおもしろし公孫勝は前傳にもさせざる役なし

只軍陣に臨みて風を禱すと魔法を降すのみならずしか
れども宋江の第四位にあつても小に唐山には儒
者に重て道教を推尊す故に兵用の次席にしたる也原
是方外の人なれば位階の沙汰は相應しかりぬに似た
り他は深山幽谷を甘して浮世を厭ふものにして此は
好漢等と共に羅國に赴かすとも身を措く処ある
べきに李應欒廷玉等とのしく僕に異形に赴かせし
は^は残余の數に充んたり前傳の作者の意には却て本
意なきことなるし評十二
樂和が身の上がを求めぬに權且鄭京の弟子に友

りて建康なる王宣慰の府中にありしは後に花孀花孀の妻の妻
 秦孀秦孀の妻花逢春筆を極極のてん存の伏線にて樂和
 の人柄には相應しかりぬ趣向也この伏線に巧拙あり
 高平の作の伏線は看官に心つかれず其作の伏線はは
 やく待待模としりる、也後傳には拙き伏線二三ヶ所あ
 りこの段の樂和もそののとつと見よ一し評十三
 郭京が建康へ赴く道中なる旅舎にて汪五狗がぬすみ
 たる鷄を僕にうと嘆嘆ひしは時遷か祝家在の故態也只
 禍の甚しかりざるの又郭京が豊樂僅なる錢老が家
 に宿せし折玉箱の女兒の妖怪に馮馮氷しを禳除人とし

て却て妖怪にいたる懲されし段は始より郭京の醜態
 を寫す為にして錢算外の女兒の爲に作り設たること
 たりぬぬともこの女兒の美しありし但見もあり且その
 妖怪の郭京を懲す時妖怪の言に我是北幽王太子與你
 女兒有天縁之分故來相聘聘なりよ小ともあるは郭京
 が逃去りし後一道德の法力によりてこの物怪竟に退
 治せられしなといふ事の終りを一行しよしおとさき
 諺也その錢算外の女兒のこと、蔣敬の水厄を極極のた
 り、小茅菴の老僧淡然のことなどは在第十陰徳ありて
 陽報の文たし総一部の物ありに干からぬこと也と

も必その終りを詳にして談話を明かにすべしこの二
 人のことと落着なきは惜あし作者の既筆也評十四
 李俊が縹緲峯に雲を賞して石版の祥符を得たる又夢
 に黒崎トウチ騎りて梁山泊に到り宋江に對面してい
 はれしこと且童子が李俊を喚て王といひしなど皆是
 後に暹羅の國王にちよ二き前兆たるよしは論なしし
 かれども梁山一百八人は所去豪傑也縱かゝる祥符あ
 りやともその身風雲の會に果して異邦へ推渡り且夢
 国の内乱をうち治めて王にたるともさまで成しかた
 きことにはありさよべししかるに先かくの如き祥瑞

を寫し出して伏線としたる作者の腹内を推量するに李
 俊は前傳天罡三十六員の内にて第二十八位にあり多
 くは省官の巔頂のつねぬ役者也とるを後傳に披萃し
 て第一の人物となすをもて初にこれらの祥瑞をもつ
 くしく寫し出さぬは李俊に貫目のつねぬ故也是又
 せつな細工にて已ことを得ざる待棋なれば省官あか
 ぬ心地すべし上にもいへるかことと李俊は宋江の死
 友にあらずその身に垣をせん為にはやく宋江等を見
 かぎりたるものなるにいかなるは宋江は懲すまに李
 俊を受して夢に托して後々の吉事をかゝるは告たりけ

ん心得かたきことにもなる然るを蔡昊が這回の評に忠
義堂之石碣鑽入地底縹緲峯之石版落在山根忠義堂石
碣是作一番收斂縹緲峯之石版却作全部提頭用各不同
文章亦異最好手筆といひしも心得かたき上にも既に
いひしことく前傳忠義堂の石碣の斂を收めしに由り
宋江等百八人真の忠臣にたりたれば全部の提頭も亦
こゝに籠りたり石碣の始終は前傳にて事果たると又
後傳の開手に石碣材を寫出し且李俊が祥瑞を得た
回にも石版祥符のことあるはうるさしよし也石版を金
牌に易るとも黄紙の霧蒙かしつるとも別に仔細なき

こと也か一寸くも後傳の作者のかの初善中惡後忠
の三等あるをしりざる故にかゝる意気ちがひ多かり
この石版のことなどは就中甘心しかたし評十五
李俊の童威費保倪雲高青とにも常州の城内にしの
い入て元宵の燈籠を見たるとき巨太守に囚れて獄に
繋れたる事の趣は前傳に宋江が夜しのいこ小鼈山を
觀たる故態にて後半段おなじかりざるのみそのおも
おけ珍しゆなし李俊が高青の諫めを聽ずして進みて
常州へ赴きし爲体はその勇おまゝあるに似たればとも
歎する所お兎に異ならぬ是日暹羅王にたると一き人が

李俊
挿
し
し
し

か も こ も を に の り 忠

き 金 の 又 亦 了 同 石 忠

◎

李俊賞保秋成は素より武勇の聞えあるもの存子に編

挿の么人こみ入りし時三人共に手を取て細につき

しはあまりに腕あり實に是孩児態を存せかみのよ

國書刊行會

はなほ寫しとある一し一部中の拙稿にて憂趣存

し

りにけし似けなし。二一をもて、蔡昊の細評にも、李俊做孩
兒態とりへり。畢竟樂和が計畧によりて、李俊を拯ひと
り、遂に金鰲嶋へ赴せん爲に作り設けたりの子、巨太守
丁廉討等が奸惡をいたく懲して人意を快くするに似
た水にも深き意味もなく、又おもしろみもなし。評十六
童威倪雲等が李俊を拯ひとりん爲に、巨太守の求む所
の賂銅三千貫を調達すとて、猛に海賊をなす段は、樂和
旅逢春等と環りおほせん爲に、水にも初善中惡後志の
ことともて見れば、わろき趣向也。この段重訂本には一
頁あまり文を寫易て前後にしたる。卷三第九回三十の
左より、四下りの左ま

下りて童威樂和等おのく身のうへはなしに及べり
也。然るを重訂本には九回の初段に童威と樂和と先お
りましもの物かたりをさせとて、李俊の再傳を寫出し
たり。このところ文の移り俗にいふ數かり棒を出せし
やうにてあらければ也。畢竟原本には第十回にある物
かたりを第九回の初段に引おけたるのみ、そのことは

初段に引おけたるのみ、そのことは
初段に引おけたるのみ、そのことは

りに似せなし、二一をもて、蔡昊の細評にも、李俊做孩
児態とり、^{此下ニナルベシ}畢竟樂和加計畧によりて、李俊を極ひと
り、遂に金鰲嶋へ赴せん爲に作り設けたりのみ、巨太守
丁廉訶等が奸惡を、いたく懲して人意を快くするに似
た水とも深き意味もなく、又おもしろみもなし、評十六
童成倪雲等が、李俊を極ひとらん爲に、巨太守の求む所
の賂銅三千貫を調達すとて、猛に海賊をなす段は、樂和
夜逢春等と環りおはせん爲なれども、初善中惡後志の
こととも、見れば、わろき趣向也、この段重訂本には一
頁あまり文を寫易て前後にしたる、<sup>卷三第九回三十一の
左より、四下りの左ま</sup>

也、且二句の増補あり、縦談世事、壹應缺説、到人情、刺破鳴
これ也、明板の原本第八回の末の段、樂和と童成と、料り
す環會ひしりみにて、いまだ談話に及はず、かゝて第九
回に至て、初段よりして、李俊の始末を云々と寫つり、收
てさて、童成樂和等おのく、身のうへは、及しに及べ
也、然るを重訂本には、九回の初段に、童成と樂和と、先お
りまし、の物かたりをさせ、てさて、李俊の再傳を寫出し
たり、このところ文の移り、俗にいふ、藪かり棒を出せし
やうにて、あらけれは也、畢竟原本には、第十回にある物
かたりを、第九回の初段に引おけたるのみ、そのことは

圖書刊行會

この間ニナルベシ

は 物 し し あ る 収 れ り 鳴

第一回内の詩句に、緑林豪俠舊識名、詠到人情劍欲鳴と

いふ詩句あり、しかるに第九回に、暮吳か下り二句に増

補したり、その第二句めの詠字を、詠に易たりのみ同句

を再出せしは、いかしをや、此れは無用の増補也

コノ間ニナルベシ

相同じしかるに蔡昊の第十回の総評に前回樂和遇童
 威後重叙李俊始末中間若干事跡婉々四五言入此回
 只用一二筆便輕輕掉轉接得毫不費筆力只如一氣呵成
 全無扭捏牽挽痕跡此等筆力豈尋常稗乘家所能といへ
 りみづから筆削せしことを自賞にはあるはかたはら
 いたし原本を見よもの、無にあり世に思ひゆんい
 と浅はかなる誇説と見よし評十七
 花逢春小海船内にて鯨を射る光景は七又花棠の故態
 を写せし也親の子なればともある一ししかれども鴻
 雁の優美なるには及ばずこの時鯨の腹内ト二三十觔

此の鯨の腹内ト二三十觔
 花逢春小海船内にて鯨を射る光景は七又花棠の故態
 を写せし也親の子なればともある一ししかれども鴻
 雁の優美なるには及ばずこの時鯨の腹内ト二三十觔
 李俊か金鰲嶋をうちとりてその勢に乗して暹羅の城
 下に攻入り遂に和議成りて退きて金鰲嶋を早まて
 北はめづりけなし評十八
 北はめづりけなし評十八
 李俊か金鰲嶋をうちとりてその勢に乗して暹羅の城
 下に攻入り遂に和議成りて退きて金鰲嶋を早まて

相同じしかるに蔡昊の第十回の総評に前回梁和遇童
 成後重叙李俊始末中間若干事跡婉々四五言入此回
 只用一二筆便輕輕掉轉接得毫不費筆力只如一氣呵成
 全無扭捏牽挽痕跡此等筆力豈尋常稗乘家所能といへ
 りみづかり筆削せしことを自賞にほむるはかたはら
 いたし原本を見るもの、無にあり世に思ひけんい
 と浅はかなる誇説と見るべし評十七
 花逢春の海船内に鯨を射る光景は亡父花榮の故態
 を写せし也親の子なればさもあるべししかれども鴻
 雁の優美なるには及ばずこの時鯨の腹内に二三十筋

の癩頭ウミボウガありていまだ消化せざりしなどあるは甚し
 き譏説也唐山の文人多くは海錯のことに疎かり鯨は
 只鰯を食餌とす他魚の口中へ入るおればみな潮吹寝
 たり吹出すといふなるに二三十筋はありたる癩頭ウミボウガ
 などを吞むことあらんや笑ふべしこの後花逢春は暹
 羅國にてもしばし射藝をあらはしたり家業なれば
 さこそあらぬ燕青も又しかなりさは北前傳に多しあ
 りはめづりけなし評十八
 李俊が金鰲嶋をうちとりてその勢に乗して暹羅の城
 下に攻入り遂に和議成りて退きて金鰲嶋を宇りまて

しは 鯨は 鯨は 鯨は 鯨は 鯨は 鯨は 鯨は 鯨は 鯨は 鯨は

童 回 成 へ ら い 態 鴻 勅

又云鯨はせびくしらのみ鯛をもて食とすこの故に糞
ありこの他の鯨は糞なし物を食せざれば也蓋鯨は氣
をもてみつからやしなふもの也實に是一大奇臭とい
ふくし後傳の作者かゝることをしらす杜撰尤笑ふに
堪たり

の物かたりは、大かた尋常なる筋にて、とせる見ところ
なしかんて神醫安道全が、高麗王と瘡語を乞ひ、徽宗の
勅命によりて、盧師越と共に朝鮮にゆきしか、まにそ
の船金鰲嶋の頭りにて覆り、料りず李俊に救れ、廿日
あまり逗留し、遂に汴京へ帰りしは、後に李應樂、延玉等
の衆好漢を倡導して、暹羅へ赴く依線にて、聊なる幼場
なれども、前傳の故態を倣ひしことなけれは、なかく
におもしろし、この後安道全は、盧師越に娼れ、その奸
計に陥られ、遂に亡命して、聞煥章に遇ふ物かたりも、前
傳の塚を離れ、て終り成したり、これにより、蕭讓、金大堅

は、連坐にて、配刺せられ、家眷は、聞煥章に養はるゝこと
なれば、巧なるにあり、ぬとも、筋よく融りて、やすらかな也
か、て又、徽宗の再傳に及んで、童貫に、役使せらるゝこ
となれば、役のかけや、ま耳しかり、亦、徽宗もし、俳優たり
は、必、彼不足をいふべし、又、聞煥章は、前傳にも、後傳にも
因みなきもり也、但、初は、高傑が、参謀たりしを、心を、ま正
しき故に、おはすして、退隱したりといへるのみ、この、聞
煥章を作り出せしは、後に、その、女兒を、李俊の、妃に、存さ
ん為也、後傳の、作者、蠻女をもて、唐山の、勇將の、妻に、存さ
いと、思ふをもて、かゝる、依線多くあり、これらの、筋には

國書刊行會

まこと苦心しつらめと推量すこのおはひ宋朝の奸臣
等趙嗣良の悪策を信容れて金國と謀し合し遠をせむ
る物おたりありこれ亦呼延灼父子宋公王進等を引
出すへき存なればはどか存はぬことすらおまりに
長きをうらみとす二帝北遷の物おたりは虚實相半は
すれとも讀文の人は誰も知れることなりおなじくは
此も短く寫すを作者のはたりきとす一きにこれらの
長物語はあらくちす也前傳にはあゝる他事を寫せ
し處の中はかりもなし是妙作なり所以也評十九
蔣敬の江中にて陸祥張徳に割され江水以身を投て平

くして死さしはいくらもある物おたりなれば奇と
するに足らず尔後蔣敬は潯陽樓にて宋江が反詩を題
せしことを思ひ出して更に亦詩を題せしは勉めて前
傳の照應を旨とせし趣向なればも前傳の作者の意に
は稱ふべくもあらぬ寫さま也上にもいへることく宋
江が反詩を題してその身を唐の黄巢にたとへし事
なればその本心にあらずして皆是魔煞の所為也けし
當初宋江が晁蓋等七人の必死を救ひて梁山泊へ落ち
つめはせしより以来忠義堂に石碣降りて招安におふ
まび多分これ魔の所也この故に言に仁義忠信を説

けども道に稱はぬ事ありまは瀋陽樓の壁に反
詩を題し或は秦明の妻子を陥れて見かへしす或は朱
公を山寨へ引入れん爲に呉用と計りて李逵に小衙内
を殺させ或は盧俊義を引入れん爲に計りて罪に陥れ
て後に拯むとりしなと救奉むに違あらず宋江すらか
くの如くこの餘のものども火を放ち人を殺して物
ともせざりしはみな是魔界の悪行なれとも宋江は殊
さらに朝廷を敬ひて連りに招安を願ひしはさすかに
本心なきにあらず譬は狂人の醒たる折は本心に返る
か如しこのころを得て水滸傳を見ざる故に羅貫中

は水滸傳を作りし悪報にて子孫三世唾なりしなとい
ふこともいひ来たり續文獻考かて宋江等の百八人魔
煞既に消滅して眞の忠臣に在りし後その遺たるを拾
ん爲に後傳の作ありとも瀋陽樓にて題したる反詩友
とを引ひて舊の魔界にすべからず然るを照應せし
故に前傳の作者の意には稱ふべしともありすといふ也
西遊記なにも此ころを得ざる一し三藏法師かいく
た心も孫悟空の諫めを用ひず却て他を逐退すしは佛
法に障礙をなす魔王と爲に魅せられその本心を喪
ひし故也只是宋江三藏のみはおもふに今日われも人

も家養良友の諫めを用いず勢ひに乘り短慮を事とし
て後にいとく悔しと思ふは、み友是魔鏡の致す所お
それ恨むべき事なりず也、これりの懲言は姑く措てさ
て蔣敬は潯陽樓にて料らす穆春に再會しつるにより
那陸祥張徳の宿所をばやく鞫出し、穆春遂に蔣敬と俱
にその処に到るに張徳は既に陸祥に殺され張徳の妻
はか収てより、陸祥と密通しつるものなれば、そかま
にてありけるを穆春いたく責懲して悪事を遺なく白
状致させ、やかて這淫婦を殺し又陸祥をも殺して、蔣敬
加奪取られたる許多の銀子をとり復し暢快得業、只是

與張徳報了仇、なごいふまでいとあもしろし、張徳陸祥
の二賊を一箇にはやく同士撃をさせ、却その妻を殺
し、張徳か為に仇を報ふしといふすべし、このおもむき

山乃上... 大指の女... 復し暢快得業... 只是

も家眷良友の諫めを用ひず勢ひに乘り短慮を事とし
こ後にいと悔しと思ふは、みな是魔説の致す所お
そ此惶むべき事なりや、此りの徳言は姑く措て、
こ蔣敬は潯陽樓にて料らす穆春に再會しつるにより
那陸祥張徳の府所をばやく黥出し穆春遂に蔣敬と俱
にその処に到るに張徳は既に陸祥に殺され張徳の妻
はか収てより陸祥と密通しつるものなれば、そかま
にてありけるを穆春いたく責懲して、悪事を遺なく白
状致させ、やかて這淫婦を殺し又陸祥をも殺して蔣敬
加奪取られたる許多の銀子をとりに復し暢快得業、是

與張徳報了仇などいふまじいとあもしろし張徳陸祥
の二賊を、一箇はやく同士撃させ、却その妻を殺
し張徳か為に仇を報ひしといふすべこのおもむけは
よけれども穆春は粗人にこそ素より遠慮なきものなれば
は當坐に淫婦と陸祥を殺し、せめ蔣敬は文字あり且
思慮あるものなるといかなれば、淫婦と陸祥を生拘て
よしを知縣に訴へざりけん、こゝらの脱落恁々と作者
のことわりさるも又脱落也とてこの張徳か緝捕は雲
裏姐にて陸祥か緝捕を癩頭元龜といひけり、雲裏姐は
峨眉山なる雲中に出る雲姐也、大さ大指の如し、灸り

交り 粗は 霊 作者 何て 且 此 けは 殺 隆祥 是 持敬 白 妻 候 あり せ 野 お し

⑨

暢快得業のこゝろもちよん為らひめにあはせてやつ
まか、只是興張徳報了仇の存んことは存い張徳かた
めにかたきをうつたやうなものでたの意中には此間の
俗語に引あて、よみもてゆけはよと聞ゆる也水滸傳
翻刻本の点のつけやうなわけはわろし、只、孫兎等の存に

いふのみ

國書刊行會

て咲ふものもあるよし草木子に見えたり本邦には越
後トて雲中に生ずる虫ありこれ亦靈蛆の類也此は細
小にて蚊の如く也大きなるものありことを聞かず又
癩頭龜は上にも見えたる和名海坊主也この二賊の綽
号ト山海の奇物をとりに合せしは作者の洒落なるべし
かくて蔣敬穆春は既に人を殺せしに影をも隠さず他
等は海賊なるをもて殺すとも罪なきとおもひしに也
これりも淡としたる始末也この、ち穆春は賭銭の爲
に家賃に入水たる庄園家宅をうけもむさんとて蔣敬
に銀子を借りて賊主の悪棍天狗星姚環の宿所ト赴き

しに姚環計りて賭に事よせて穆春おもて來つる銀子
を掠とりしかは穆春怒りに堪おして姚環と闇宅の男
女を一人も漏さず砍殺し蔣敬と俱に逃去て登雲山及
る梁廷玉孫立等の夥に入らんとて赴く途中蔣敬猛に
病痾^{モロ}蔑りていかにもすべなけれは雙峰山神の廟内に
宿を投て将息しつる折^{マカ}焦^{ヤウ}若^{ニョウ}仙^{セン}表^{ヒョウ}泉^{セン}竺^{タク}大^{ダイ}立^リといふ三
虎の悪棍這廟裏にあり雨^{アメ}ふに竺大立か雜^カ姦^{ケン}比^ヒたる芳
哥といふ少年が穆春を認りたるにより事遂に他等に
知りぬて穆春が薬を買んとて外に出たる間に蔣敬は
搦捕られ穆春も危かりしをか芳哥と廟宇の老僧の

内通トより、穆春却て件の悪棍、焦道士、袁愛泉、竺大立、范
に宋元等を麤ヒせし爲体、武松の鴛鴦楼の趣ト似たり
ども、^おなじかりず、そのはたりキ勇ましク且華やかに
こいとよし、^{イタツキトミ} 蔣敬はこの驚きに、^{オツク} 病着早に癒りければ、
兩人やかて立出て登雲山へ赴くまで、俗トいふ世話場
にこよく出来たり、凡この所回ナレハ故意前傳の趣ト
應照せしこと、^{ウツ} 友し自然に似たる処あるのみ、こゝをも
こおもしろし、^ツ 評二十

間断なき、青州の都統制、^{カコウ} 黄信、鎮三のみ、^{カコウ} 孫に推けて
いまだ官軍に加らず、^{カコウ} 浩処に蔣敬、穆春の兩人、登雲山の
寨に來にければ、則て成の計策によりて、蔣敬を、^{カコウ} 偽黄信
にして、穆春と、もに三四百名の雑兵を従はして、^{カコウ} 寄手
の陣へ遣し、合戦の時、^{カコウ} 裏伐をさせて、大将、^{カコウ} 鄒瓊を撃捕し、
寄手の士、^{カコウ} 群を麤にしつる事、是も亦前傳に、^{カコウ} 宋江の秦明
を降すとき、^{カコウ} 偽秦明を作り出せし、計略と相似たり、^{カコウ} 只そ
の事の差別ありのみ、^{カコウ} 危成は後傳に至りて、^{カコウ} 智の増せし
こと、^{カコウ} 吳用と伯仲す、^{カコウ} 嚮には、^{カコウ} 欒廷玉に説き、^{カコウ} 薦めて、^{カコウ} 夥計に引
入ル、^{カコウ} 今又、^{カコウ} 偽黄信を造作して、^{カコウ} 大敵をほろぼしたる、^{カコウ} 樂和

と龜成は才學はじめの樂和龜成にありす、是は用ると
用ひざるはよるもの歟、これも亦怪しむ、し評二十一
龜成が計略によりて、董信は奸臣等に疑れて罪せられ
んとしつる折、登雲山の寨より、竊に蔣敬を遣して、董信
に説鷹めて身方に引入れし事なれば、みな前傳の蔣稿
より出たり、このち孫立、安道全等、蕭讓、金大堅の扈に
安道全、蕭讓、金大堅、二人、此、穆春を聞煥章、日宿所へ遣して、
時既に登雲山に在り、穆春を聞煥章は、その女兒、聞小姐の事
の家眷を迎とりする、折、聞煥章は、その女兒、聞小姐の事
に就きて、悪棍、焦面鬼に、逆公事をし、かけ、此、その禍を
避んとて、蕭金の家眷と共に、聞小姐を、登雲山の寨へと

こ頼造し、その身は焦面鬼の評言をいひと、かんとて、東
京へ赴く程に、穆春は、途にて、焦面鬼を見知りて、殺して
野中の井へ沈めしを、聞煥章は、知らずして、東京に逗留
して、焦面鬼を待けれども、他、か告訢の事なけれは、さら
に、登雲山に赴きて、竟に、その隊に入りし事、みな已こと
を得ざるに出て、且、その筋よく融たり、蔣敬と穆春が
登雲の野に入りし後、この兩人に、一、役つ、つけたるは、
作者の、はたたりき、償すべき所也、評二十二
これよりして、後、金兵入寇の事の趣は、上にも、粗い、
加如し、その間、呼延灼の再傳、その子、呼延钰の傳に至り

國書刊行會

て聞煥章を呼延鈺の文字の師にたのみし事存どはの
呼延の家眷を將て登雲山へ赴きし也ち金軍入寇のとき
後回の伏線也又徐寧が子の徐晟が初て出世の故に重
他の甲冑唐棍を盗たる光棍フルキを趕オヒあけ来つる途中にて
初て呼延灼に対面して竟に甲をとり復したる為体は
看官に懐舊の涙を拭せんと欲せし趣向にこいと受た
ししかれどもこの甲の事はこの段のみにて後々に至
るまじ何の益にもたす惜しいか友この甲を暹羅國
にて有用の物にたさは前傳後傳終始相應して工夫友
かりんに事その義に及ぶおとりしは櫃を返して珠を忘

れし類とやいはまし評二十一ノ下
呼延鈺徐晟義を結ぶ異姓の兄弟にたりて各々親の武
藝を承嗣き智勇兼備の為体は三國志演義に寫せし関
興張苞の餘韻ありていと受たしかたらく宋の十將黄河
に金兵を防ぎしとき汪豹が逆心によりて呼延灼が隊
よりうち破られ金兵竟に黄河を渡せし光景は實録に
行傳して自然の如し呼延父子徐晟と共に宋を去つ
ぬりに行過す既に飢渴に及びて山中に獐を射て飢に
えんと欲りせしも受たしこの時料らば萬慶寺の悪僧
を殺せしは後回の伏線也かくて宋金楊林等に相遇す

國書刊行會

て飲馬川の寨に赴き、李應の隊にかりしは事みな已こ
とを得ざるに出て一敵の佳作也。この次ニ則萬慶寺の
曇化和尚金の大将幹離不に降参して五六百の兵を乞
催しその身の兵をうち合して飲馬川の山寨を攻しと
き宋氏か計策により萬慶寺を燒撃て曇化を退せ遂に
曇化を生拘て惡僧等をみな殺し殫せし敵は李應の武
勇朱武の計策並に呼延父子徐晟朱公等はじめて山寨
へ到來せしかは一擲させんとて作り設けし竹場な
ればあるべき筋にて味いなしかんと曇化を燒殺す時
明板の原本には樊瑞か封籠の偈あり重訂本にはなし

戲れに過ぎたりとて蔡昊か削り去たふト也。こゝを得
かたし評二十三
宋の宰相李邦彦か和議を主るにより三鎮の地を割き
一百万の金子、五百万の銀子を金朝に與へん爲に諸州
豪家の金銀をたてまつれとて嚴令ありといへとも多
くはその金子を調進しか收て罪せらるゝもの少から
おこの故にハ旋風柴進も又滄州の管内に繫れたりこ
の時滄州の太守高深は高廉の弟也此は柴進を殺し
て兄の仇を報んと欲りすよし飲馬川に聞えしかは
李應等兵を發して滄州城をうち破り柴進を拯い出さ

んとて先戴宗を遣ひてよしを柴進に告んとす。上城
門望く閉ざれ。て連に入ることなれず。わして李應等滄
州城へ推よせて攻撃つこと急也。ければ高深先柴進を
殺して寄手を退けんと。節級甲子等イヒツケに分付て午を下
させんとし。たうけしに吉孚といふ節級。遠謀あるもの
に。し手段を以柴進を極ひ出して。唐牛兎の居尾にしの
は七置く段に。吉孚加甲子等を欺ん。た酒を飲せ。今晚
柴進を殺す。としてその用意をしたりしかば。柴進驚さか
友しみて甚しく。とら乱し。たり。此段蔡莫の評上。醜然ヒモ是
人情とあれば。も涙泉の湧人如く。悲泣して命を惜みし

爲体柴進にはいと似せ。友しかん。ても大丈夫といふ。
き。亦是筆はその人からに。稱はさる書さま也。かんと高
深は飲馬川の寄手に。う古に。さ此に柴進は家眷并に吉
孚唐牛兎と俱に飲馬川へ赴くま。てすへて前傳の舊稿
上。聊もおかしかり。おこの物おたりは。一部中の拙作
也。評二十四
この時李應等天子の安危を知らん。爲上楊林戴宗を東
京に遣せしに。いんその戦ひ。乱妨に。荒果を。宿り。一と家
もなく。嘆ふ。き糧もなかりし爲体何となく先おはれ
也。かんと楊林か燕青にあふ。飯に燕青も食盡きたれば

國書刊行會

鳥を射し飢に充んとて、弓箭を携へ、一個のコモノ刀を従へ、
て山間よりいりて来つる爲体もいと慶たし、これより戴
宗楊林の二人、燕青の莊院に尋ねしつる程に、金兵既に
京城に逼りて危かりければ、郭京則六甲の法をもて敵
を退けんとて、金銀を食ひ、邪淫を事とし、こゝに遂に
姚平仲戦ひ敗れ、て大宅を離れ、李綱神師道の計策行れ
ずして、徽宗欽宗金營に囚れ、宗澤高宗の御駕を救ふ段
まで、正史におはぬ事多かり、そは作り物語りなれば也
是より先に、蔡京童貫高俅搦王輔等の奸臣は、みな罪
せられ、て迷悪の軍州へ安置せり、折王輔搦王梁師

成は刺客王鐵杖に殺されけり、是等の長物かたりは、李
俊等がうへに干る事ならぬともされ、ゆとて寫さぬは
燕青王進等のよりて来たる所詳ならず、前傳にはかゝ
る他事なし、さるゆゑにいとく妙也、評二十四
燕青か楊林戴宗を將て、大名府に赴きたる時、拾ひとり
たる木夾キツカを照驗アサトシとして、楊林と共に金營に入ることを
得て、道君皇帝に朝見して、柑子青子をたてまつり、御筆
の便面を賜りて罷り出る故、前傳李御々の樓上とは、そ
の趣異にして妙也、鬼畜の如き金兵等か二帝を警固の
爲体は、但見を見ても想像さし、しかるを燕青は、那木

夾を證驗にして、輒く徽宗に朝見したる、看計素より衆
に提れ、その才あまゝあるにあらざれば、行ひかたき
事なるを作者の意匠いと愛たし、那水夾の事なれば、今
もあまゝき制度なれば、看官の感深かき、一し燕青か料
りおも、金の木莢を獲たるよしは、下の評に見えたり、又
おもふに、この段は、前傳李獅々の翻按にて、招安勅免の
宸翰を、詩句の便面に易たる也、しかれども、事の趣風流
と殺成と、太平の日と、乱離の時と、事物此彼あなしから
あかくて、こそ翻案の作者の奇才を見るに足るなれば、世
に稗史を好むもの等閑に見過すべからず、評二十五

燕青又盧俊徳の妻と女兒の金堂に陥し、しを購ひ出さ
んと欲するに、一千の銀子を調進せむれば、許さぬかた
しと聞くと、その銀子を、このへこ金堂に赴きしに、こがら
後此たれば、一千五百金を費さし、れば、存ほ許さぬと
により、退きて、戴宗を飲馬川へ遣はし、李應に件の銀子を
借りんと欲する、その苦心、實に忠義魂、拔萃たり、その
間料り、亦王進に對面の段も、亦おもし、且王進を説
伏して、遂に梁山殘餘の隊に加はるゝ、伏線と存と、義
論も亦妙也、此は王進は、身來、神師道、
前傳に所云、老種、
相公是也、
に從ひて、兵馬指揮使の職を授けられ、鶴に呼延灼、汪豹

筆の九將と俱に黄河に陣してありけるに汪豹が野心
により諸陣敗れて乱走したる。そが中に王進はなほ四
五百の残兵ありしは、金鷄嶺の麓に野抵陣に營寨
を結んであり。假に金朝の服色に改めし、竊に御方の兵
を招くと欲する折、燕青はこれを知りず。王進が雑兵に
白船れて料らば、王進に對面して名のりあひしむこの
ときの事也。おもふに前傳に王進は史進に別れ、老母に
俱して神師道の府内に赴きしを、後に史進が力づぬゆ
きしにかの府内にありせりしは、得あはせりしよし
也。しかるにこの段に王進がその身の元を燕青に告る

に及ひし始より老神經略相公の府内にありしよしを
いへり在らば史進かたづぬゆきし時、いかにしてか遇
せり。王進は親の時より禁軍の教頭なれば、その名
も特に高かるべし。且神師道に任用せられし、兵馬指揮
使ならんには隠れあるべし。うもあらずざるを史進か得
遇せりし、その故なくはあるべし。かりば後傳の作者一句
もこの義に及ばず。王進か史進の事を云々と燕
青に問ひしのみ、この故にその出沒を看官に疑しむこ
らば作者の牛ぬめりとし、いふしとて王進はこの、
ち又金兵にうち輸ゆて、竟に飲馬川の隊に入る事なと

を遇名揮得句燕こ

兵集四心
にののしる

40

王進か假に金の服色に改めてありしは作者の用心に
 て王進といふことをはやく看官にしらせじとてのた
 め也金兵の中ニ挿れて敵を欺くためのみにあらす

戴宗飲其川より帰来て燕青が所望の銀子はとりのい
けれども金の大将捷頼宋の人殺を収管して大名府に
退きぬと聞えしかは燕青は又戴宗楊林と俱に大名府
に到て莫氏盧俊盧氏の二女人を贖出す折大刀関勝は
偽符帝劉豫を諫め收て身退かんとしつるに劉豫
怒て関勝を獄に繋ぎ竟に刑せりると聞えしかは燕

戴宗飲其川より帰来て燕青が所望の銀子はとりのい
けれども金の大将捷頼宋の人殺を収管して大名府に
退きぬと聞えしかは燕青は又戴宗楊林と俱に大名府
に到て莫氏盧俊盧氏の二女人を贖出す折大刀関勝は
偽符帝劉豫を諫め收て身退かんとしつるに劉豫
怒て関勝を獄に繋ぎ竟に刑せりると聞えしかは燕

青等三人驚憂いて拯むとらんと欲すれども謀の出る
所なしかりし程に一日酒店にて東中皮卷内第三家
柳某といふものが酔て遣したる木夾クササツを燕青はやく拾
ひとりてその身は竊に金堂の僮使に打拵戴宗楊林を
承局に打拵して城に入りかの木夾を証驗として関勝
を救取る故前傳李家庄にて兵用か僮使をもて李應と
杜興を身方に引入れたる奇計の舊稿なれともこの木
夾は後にも用たれど空閑なく且前傳に燕青は密語に
も通したるとあるに照應していとよく出来たり燕青
か再傳はこれ一部中の秀逸也上にも既に評せし如く

は所せむ味ひなし王進の傳には愚案なきにありず
これに梁山残剩の一隊に加入して李俊の爲に暹羅國
の功臣にせしはうらみ也。そのらの愚意は團圓の評内
に是トす。評ニナホ

戴宗飲馬川より帰來て燕青が所望の銀子はとりのひ
けれど金の大將趙振東の入れを収管して大名府に
退きぬと聞えしかは燕青は又戴宗楊林と俱に大名府
に到て莫氏盧俊盧氏の二女人を贖出す折大刀閔勝は
偽帝劉豫を諫め收て身退かんとしつるより劉豫
怒て閔勝を獄に繋ぎ竟に刑せり。と聞えしかは燕

青等三人驚憂ひて拯とりんと欲すれども謀の出る
所なしかりし程に一日酒店にて東中皮卷内第三家
柳某といふものが酔て遣したる木夾コウサツを燕青はやく拾
ひとりてその身は竊に金堂の僮使ト打拍戴宗楊林を
承向に打拍して城に入りかの木夾を証驗として閔勝
を救取る段前傳李家庄にて兵用か僮使をもて李應と
杜興を身方に引入れたる奇計の舊稿なれともこの木
夾は後にも用たれて空閑なく且前傳に燕青は密語ト
も通したるとあるに照應していとよく出来たり燕青
か再傳はこれ一部中の秀逸也。上にも既に評せし如く

如く燕青語に木の徳と関勝林をく三家

評内羅國のりす
府にのりす
府にのりす
府にのりす

41

再考

① 王進晁蓋高俅の事には、作者の隠微を發明しし、予も秘
藏の評あり、是は別にし、予をもて布置せず、こゝには
只本傳につきていふのみ、
評二十六

燕青は前傳にても十二分の愛敬あり本傳にこれはいよ
／＼看官に嬉しかりる日本傳も居逸なれば宋安平苑
逢春を降人の外燕青なりて暹羅王にありきもの亦あ
りとしむおもほえず後本傳のまゝ也とも後に彼王に
なす寫さまはしらくもある一し今さら無益の贅言な
れば愚案あるども具にせず見る人し水を思ふし評
二十七

金の大将劉猷張信輩豊と堡に三千の大兵をもて飲馬
川の壑を攻撃飯休飲馬の衆好漢登雲山なる孫立等と
兵を合せんと欲する伏線にて日闕勝王廷等新に加入

せしものに一役つけんとこのゆゑ也萬慶寺の旧跡に
て地雷火をもて全勝を得たる在体も人意を快くしつ
このみさして評すべき事なし評二十八

李應等の衆好漢意に飲馬川を棄て南へ赴く陣中の逢
中南北交界の處にて金の大将烏禄の大營と對陣して
戦んと欲するに烏禄は宋の降將任豹の計によりて固
く守りて出戦はず燕青又かの木夾をもて金營に入て
金の元帥韓懶の使と唱へ烏禄に任豹を疑せし竟に烏
禄を撃走りし且任豹を殺して黄河に金兵を引導して
怨を雪し段猛き意味あり趣向にはありぬと件の木夾

こゝに至りて用たつこと三たび李應等三百隻の火船を
獲て南行の便り宜しかりしもこの金勝トよれば必
るべき処也かくて李應等河を渡りて楊劉村ト陣せし
時蔡京童貫高俅等の奸臣汴京にまた敗れしりし時配
刺せりるゝといへども國の乱れによりて遠く軍州ト
到らぬとか儘郷村ト隠れをりしを李綱が宰相トなる
に及ぶこふたゝ儋州へ配せりる道中金管を避るが
爲に中牟縣まじ來到せし夜李應等の衆好漢他等を陣
中に招きて酒を薦め竟にその罪を責め毒酒を沃ぎて
殺す故前傳以來の冤を伸べこ人意を快くするにあり

蔡京童貫高俅蔡攸蔡京子等四人梁山殘餘の好漢ト葉鵠
せりれと終りをとりしは宋江を葉鵠したる悪報を示
せしなりこれらよしは上にもいひなき前傳トは要
なけれども後傳ト至りては亦是勸懲の大關鍵心ある
べき所なり勿論正史トは合ぬとも素より作ら物語の
うへなればそは咎るに足らぬ關勝も正史トは劉豫か
るト斬られしをこゝトは燕青ト救はせたり讀史の後
ト稗説を見れば虚實分明にして作者のはたらしもよ
く知り又おもふに飲馬川も登雲山も皆是梁山泊の
殘豪なれども登雲山は星外なる梁廷玉を主將とすこ

の故に李應の隊にて燕青戴宗呼延灼関勝樊瑞公孫勝
朱武宋公等の衆好漢に四名の奸臣の積悪を攻させ且
太祖皇帝の誓碑の第三條に大臣は罪あるとも刑戮す
ることなかれと此はとて刀劍をもて此水を殺さず
鳩酒を灌ぎて結果けたる手段におもしろしはじめ
蔡京等かこゝに宿せんとしつゝ折燕青と相識なる葉
茂といふもの差束の夫役たり他は盧俊徳の隣舎なり
ければ燕青料らふ再會せし折則葉茂か口よりして蔡
京高俅等の事の具に知られしむ自然の如し又樊瑞か
押差官を面叱しつゝ勝の李應等か舊怨を述て北に向

りて拜奏しさて刑を行ふ処寫し得て尤妙也但李應は
前傳の大立物にあらずこれか座頭は不足なりしを思
ひの外よく出来したりそは上座に公孫勝あり且関勝
呼延灼燕青楊林等の老つはもの相並て一座よければ
華やか也この人々あまゆゑに李應の捌きに壓か利て
釐宋江といはまゝの女作者の用意珍重々々評二十九
是より先に戴宗は建康に赴きて新都の消息を探りか
へり来りて当宗宗澤は身まかり李綱は宰相を罷ら此
金の元木四太子十方の兵を領て建康に到ると聞えし
かば杜元は河南を棄て淮西に退き京城空虛にありし

よしを殺しめは李應等進退維谷りていかにもせよしと
 議す折金の兵到來し李應等大家驚きて快退せしと
 奔走しつ、その鋒を避けるに、この夜分の事
 ありければ呼延鉞徐晟の二人は金の隊中へ混入し
 て脱れ出るとよしなれば張龍張虎と假名して権且
 金營に在り遂に横衝營の大將に執立られ、阿黑麻の
 麾下に隨後し金營に囚れとありし宋安平宋清の子に名告
 りぬて三人竊に示合し牛段を以盤纏をと、の一旦
 宋江が遺愛の名馬玉獅子と呼延灼が御賜の駿馬烏騮
 馬とこの營内にありければ又牛段を以件の二馬と又

一疋の駿馬をも乞受て牽出し呼延徐宋の三少年各こ
 の馬にうち騎りて脱去し一段は前傳の舊稿に因るこ
 となれば殊さらにおもしろしこのとき盤纏をと、
 のふる條下に異同あり明の萬曆板の原本には配下の
 孩子に常例錢を出させて四五十兩の銀子を得たりと
 あり、重訂本には官事の小頭目を欺きて明日本營の衆
 孩子を帯て點檢の令あり支餉銀一百兩入用也とて件
 の銀子を受とりしとあり、第一回阮小七が梁山泊懐嵩
 の段より第四十回の團圓まで文を易たふ処多くあり
 古書を再刻すとして已かまゝに筆削せしはようなき事

也又この次梁山泊宋江等の廟内塑像の但見結句より
上六七の二句破者童婦金剛生的再授紅塵とあるを脱
したる原本を以て誤脱を訂さいればよみ得たき
処あり異同はしよくわきまへたため評三十
呼延鈺徐晟宋安平等三人脱れて梁山泊の頭上列りし
時既に飢渴に及ぶしかば水邊なる酒店に立寄りて酒
飯を喫しゆるに酒保が蒙汗薬をもち件の後生等を昏
倒致させ盤纏も駿馬も奪んとせし折かの武太郎の友
に奸夫を拿んと欲せし鄆哥が食客になりてこの酒店
に在り三少年の凡人ならざるを見て解薬をもち救ひ

醒して互に名告ふ段は前傳朱貴の水亭の舊稿也本
傳に蒙汗薬を用ふ所樂私か花逢春二若人を拯ひ出す
ときとこの他も二ヶ所あり蔡美が評に前傳の蒙汗
薬并獸帛を奪んたに善人を昏倒せし事多し本傳の蒙
汗薬は善人を拯んたに悪人を昏倒す是との勝れし所
也といひしかとこの酒店の蒙汗薬なれば悪人を昏倒
すとはいひあたしこの薬酒には事觀面に片つけど
も前傳にたゞしく用いたるを又折かして本傳に寫
せしけりるさしこのとき呼延等の三少年思はずも醉
臥せしを奇として蒙汗薬たりしを知らざるも才蘭友

る少年には似けなして、這水亭は宋江が小頭目なり
 し、江忠といふもの、酒店にこの身は梁山泊なる宋
 江等の廟を作りてあり、江忠とは宋江の忠臣といふ義
 なるよし、蔡昊の評に見えたり、郷に徽宗の勅建に宋
 江等死没の好漢の爲に梁山泊に廟を建立せられ、各位
 の塑像を措れし也、叫延等三人よしを聞て、郵哥を嚮導
 として、梁山上登渉し、江忠に對面して、仲の神前、辰拜
 し、五兩の銀子をもて、福物を備次の日祭奠せしといふ
 この段は、懷舊の情、文外にあらはれて、看官、浩嘆す、さき
 処、寫し得し、尤妙也、さばれ、第一回に、既、わ七か、梁山、上、登、

此の段は、懷舊の情、文外にあらはれて、看官、浩嘆す、さき
 処、寫し得し、尤妙也、さばれ、第一回に、既、わ七か、梁山、上、登、

かし評三十一

少年には似せなして、這水亭は、宋江が小頭目なりし、江忠といふもの、酒店にその身は梁山泊なる、宋江等の廟を作りてあり、江忠とは、宋江の忠臣といふ義なよし、蔡昊の評に見えたり、郷に徽宗の勅建に、宋江等死没の好漢の爲に、梁山泊に廟を建立せられ、各位の塑像を措けし也、呼江等三人よしを聞て、鄆哥を嚮導として、梁山上登渉し、江忠に對面して、仲の神前、辰拜し、五兩の銀子をもて、福物を備次の日、祭奠せしといふ、この段は、懷舊の情、文外にあらはれて、看官、浩嘆すにき、処、寫し得し、尤妙也、さば、水滸第一回に、既し、七か、梁山上登

陟せし時、この廟はいまだおらず、その、古に建られたるなるべけれと、作者、うらみ、る得て、一筆ことば、し措かす、故に、詳ならず、おもしろ也、抑この宋江等の廟の事は、いはても、しよき、寓言なれども、さす、加に、所縁なきに、おらず、按仁、和郎、瑛、水滸、傳、像、燈、席、曰、史、稱、宋、江、三、十、六、人、横、行、有、魏、官、軍、莫、抗、而、侯、蒙、舉、討、之、曠、周、公、謹、載、其、名、贊、於、矣、辛、雜、識、羅、貫、中、演、為、小、說、有、替、天、行、道、之、言、今、楊、子、濟、寧、之、地、為、立、廟、緣、是、逆、料、當、時、非、禮、之、禮、非、義、之、義、江、必、有、之、と、い、つ、り、宋、江、の、廟、と、い、ふ、もの、だ、え、て、な、き、事、に、は、お、ら、ず、か、し、評、三、十、一

宋義宋 位尊 位尊 位尊 位尊 位尊 位尊 位尊 位尊 位尊 位尊

た 措 事 横 癸 之 不

第一回 阮小七が梁山泊拜祭の殿にこの宋江等が廟像

の事 新建ありきよし世の風聞に云々とありのみそ

の、古建られたりんにはハセカ拜奠の所よりこ、ト

至てみわかしとも十年はありは経たよ、し、か、此は

後回に李俊が算盤の四十歳にてはいたく年紀の合さ

るを思小、し、かのさく者はあ、る不都合の事を心つ

かぬにや素より作り物かたうなれば年紀は算用に入

れざり歎いとあかし

呼延筆三人江忠か酒店に逗留の日昔年鄆城縣の都頭
有りし趙能か兒子綽号を百足虫と喚ぶ、悪棍御管指
揮使呂元吉の女兒の二親を喪ひて落人に有りしを擡
攫ひその身は黃馬にうづ騎りて來にするを呼延鉞徐
晟所殺して呂小姐を救ふ段百足虫を馬に乗せしは後
に呂小姐に騎せん爲也と蔡昊か評に見えたりと、か
る悪棍の騎馬有りしは新哥也當時馱賃馬なといふも
の、なき世なればに女あらんこの呂小姐は玩贅にて
たぐても事の濟むものなればとも後に鬻女をもて呼延
鉞等に妻するに嫌ひおればかゝる厄會を寫したる也

國書刊行會

願

これすらあふに王婆をつくり出せしは呂小姐に以添
なきにゆかり又鄆哥か妻を索れともいま大得お友と
いひしも後に共濟の女兒を妻せり、伏線也これら
は例の待棋マツシなればともこの作者事毎に約束おらせんと
欲するか癖と見えたり約束なくともよき事を強て言
を設れば待棋にたりてなかくに拙し又呼延鉞か江
忠を諫めて、你是年老たり、悪事をなせどゆれば五百兩の
銀子を贈りて老を顧シヤクせんすといひしか後に鄆京の賊
賊をもて江忠に取せしはいとよしこかれどもその身
もなほ強盜の夥中に在るをいかいせん、鈴を盜て耳を

國書刊行會

廣く上似たるをゆすれたるにやあらんしとをかし評
三十一

江忠の酒店より鄆城縣なる宋清の宿所へ遠からぬに
呼延鈺徐義郭哥と共に宋安平に信導れしその居定に
赴きしに宋清夫婦はその子安平の逐電せし処に上
りて拿れし城内の軍裏に存ると聞えしは宋安平悲
泣に堪えりしを呼延等慰めて還道村なる九天玄女廟
の道院に退きて計議を凝す彼九天玄女廟は亦是前傳
の照應也呼延等四人は李應等の迹を慕ふて登州を
投て立出る折はやく李應の一軍に満着してよしを告

しかは李應等則宋清を拯りとりんとて鄆城縣の城を
攻破りて金の知縣郭京を生拘りぬ郭京は嚮に京城を
逃去りし後金營に投降してこの地の知縣に任せられ
圍煉使曾世雄と共に鄆城縣の守護たり又件の曾世雄
は前傳に見えたる曾頭市なる曾朝奉の孫曾達の子な
りければ宋清を殺して舊怨を復さんと欲すとおる
は亦是前傳の照應也しかよにこのとき宋清夫婦は軍
裏におらずいぬる日曾世雄那夫婦を解して涪州に赴き
しと聞えしかは李應等先郭京を降して玄女廟頭に出
せり是より先に宋金は家眷を迎と百んとてその故郷

へ赴きしに久しく信おらざれば李應等路程の便宜に
任して戴宗と楊林を遣せしに宋公は雷横の親雷漢人
をも伴んとて婆々か姪方りける錢在喙の居宅にゆき
し折錢在喙に告訴せられし金管に因りて宋清夫妻と
一所に置かす是より先に皇甫端も金管に陥りしに元
木も阿黑麻も他は名たゝる馬醫なるよしを聞知りて
そ加儘留置し程に宋清宋公對面して是より此の便宜
を得たりかゝて皇甫端外に出し折戴宗と楊林は料
り亦も再會して宋清宋公の消息を聞くと呼徐兩少年
の奪去たる名馬の贖料として阿黑麻三千五百の銀子

を求むこの銀子を調進せられは宋清宋公は中める
かたしといふにふり戴宗楊林りり來てよしを李應
等に報けしに鄧京が賊賊二千兩はあれどもなほ一千
五百兩不足也といふ程に阿黑麻は戰船を造りて
人倉に修行し曾世雄は宋安人を押來て仲の銀を拿る
と聞えしかば別燕青が討にゆり李應等先いつゆり迎
へて遂に曾世雄を殺戮し又鄧京が汴京を隔れたる罪
を責て首を刎收さては曾世雄の僕して來る二三百名
の雜兵の歸降しゆるを嚮導にして関勝楊林呼延鈺徐
歲等を濟州城へ遣して曾世雄かつて來れりと傳て城

李應等はかぬてよ、勤王の志念ありけるに畢豊を殺す、後ふた、び金の火兵の票を攻んことを怕れ、飲馬川をうき、遂に南へ赴きしは、

百の銀を求むると聞えしとき、李應等郭京が賊賊の銀二千兩はあれどもその数に足りず、戴院長到登雲山、李應等十数名の好漢、飲馬川の山寨を築たりとも、なほ一千

あまりの兵はありししか、よにこの時、軍用の銀子ありあして、戴宗を登雲山へ遣し、梁廷玉、孫立等とを借せんと欲せしは、こゝろ得かたし、嚮上燕青が莫氏、盧氏を金營より償ひ取り、戴宗を飲馬川へ遣して、李應に銀子を借せし時、その銀早にいで来つゝに、この折にのみ、賊帛の些もなかりしは、故もよある作者に問はば、知れかたぬ、こゝし評三十三

李應等はかぬてよ、勤王の志念ありけるに畢豊を殺す、後ふた、び金の火兵の票を攻んことを怕れ、飲馬川をうき、遂に南へ赴きしは、

ト入り城將中郎監并ニ金兵を剿滅して宋清宋公皇甫
端を極むとリ又楊林宋公郭哥等は那錢歪嘴の宿所に
到て錢歪嘴とその妻正代毒を研殺して雷婆々を救ひ
とリ叔宋公の妻朱若人并ニ雷婆を俱して玄女廟にか
へり来ぬる彼或は前段の舊稿或は本傳にも前回ト似
たる事おれはめづらしけり也○中上阿黑麻三千五
百の銀を求むと聞えしとき李應等鄭京が賊賊の銀二
千兩はおれどもその數ト足りず戴院長劉登雲山拿來
纔可足數不知八日可往還麼とあるはいかにも父李應
等十數名の好漢飲馬川の山寨を棄たりともなほ一千

あまりの兵はあるししかるにこの時軍用の銀子お
らあして戴宗を登雲山へ遣し梁廷玉孫立等トを借
せんと欲せしはこゝろ得かたし嚮上燕青が莫氏盧氏
を金營より償ひ取るべき戴宗を飲馬川へ遣して李應
に銀子を借せし時その銀早トして来つゝにこの折に
のみ賊帛の些もなかりしは故もよある作者に問あは
知れかたぬし評三十三

李應等はかぬてよ勤王の志念ありけるに畢豊を殺
すり後ふた、び金の火兵の寨を攻んことを怕れ飲
馬川をうり棄て竟に南へ赴きしは廻飲馬の山寨の畢

子あ 借 檀氏 折に 折は 殺 飲 畢

千 應 來 二 五 似 似 似 似 似 似 似 似

5/

はじめ戴宗楊林が來今の家に大づぬ來て來茶人に對
 面せし故に養娘小厮ありこゝに至て來茶人と番婆と
 を持て來つるのみ養娘小厮家賊なるとはいか片しけ
 ん毫もその事なし只作者の忘れたるのみ片あら細
 評中にも示これをはかぬ作者の疎漏かこゝ事毎
 に多かり

豊に始りて畢豊に終る對照也。しかるに李應筆は志願
 の吹舉を頼んと思ひたる東澤は世を去りて張所は配
 頼刺せられしと聞えしかばいよしく望を失ひて遂に登
 雲山の寨に赴きて樂廷玉等と兵馬を合してその進退
 を定むるに安道全が計議に任して金釐嶋に推波り李
 俊と一緒になりましく思へど渡海の船のなかりしかば
 金の阿黑麻が造りしたる五百艘の大海鯨を大かた友
 りず奪取て飲馬登雲兩寨の好漢等皆大洋に泛む故は
 幾條にかわかれたる長物語をこの一舉に軽々と括り
 たり扱もめでたき筆なるかな。是が中上呼延の家眷と

聞煥章父女二人そのさす方へは得中かおして登雲山
 にこ呼延灼父子にあひしもいとめでたし又思ふに飲
 馬川の山寨は初裴宣か二百人の嘍囉を聚てこゝにあ
 り南後李應楊林杜興蔡慶の衆好漢相かりて程遠から
 ぬ龍角岡の畢豊を襲ひ襲走らしめて寨を奪ひその衆を
 合し李應を推て寨王にしたる第五回又登雲山なる寨は
 はじめ鄒潤か一二百の嘍囉を聚てこゝに在り南後孫
 立孫新顧大嫂阮小七等樂廷玉危成と俱に相かり竟に
 樂廷玉を寨王にしたる第三回かくて第三十回に至りて飲
 馬川登雲山の好漢等寨を棄てもろ共大洋に泛みし

是前傳の舊稿也梁山泊はその初王倫が案なりしを
 王倫竟に林冲に殺されて晁蓋宋江案主となりぬ爾後
 宋江等百八人招安にあふに及て梁山を棄て京城に赴
 き遼を討ち方臘を征したるその事おなじからぬとも
 趣向は前後一致也これらによれば本傳を續水滸傳と
 いはまくのみなその事相似て非なるはなり評三十四
 つらく本傳三十回までの趣向を思惟るに大元良友
 義兄弟の厄難中に陥しを辛くして救ふの外又殊な
 る筋もなし先第一回に阮小七が石碣村なる窟所にて
 張幹を殺せしとき母親に俱して亡命せし路にて母

を失ひしを鄒潤の山寨にて再會せしは初山後吉也開
 又扈成は財寶を悪人先多に奪はたりしを鄒潤阮小七
 孫新顧大嫂等扈成の爲に夜撃して先多を殺しその財
 寶をとりかへしぬ晝この事の縁坐にて病尉遲孫立
 は登州の楊太守に搦捕られて牢内に在りしを孫新鄒
 潤阮小七等扈成が計に任して統制欒廷玉を誘降せし
 遂に登州城を攻破りて孫立を救ひ出しぬ晝杜興は
 孫立に頼りて樂和に書翰を届るとして東京に到り王都
 尉の府内にて搦捕られし彰徳府に刺配せられ楊林に
 再會して俱に馮告人と王娥を殺して管堂李煥が爲に

怒を復して、廳へ配所を逃れ去りしは、**自救也**。第四回李
 應は杜興の縁坐にて、涪州の知府に搦捕られ、牢内に
 在りしを、楊林則裴宜杜興と俱に計を定め、牢子に蒙汗
 藥を飲し、昏倒せせて、竟に李應を救ひ出し、女嘯六秦明
 の妻花栄の妻花栄の子花逢春萬柳庄に在りし時、建康
 の王宣慰の郭京に乞ひ、のめされ、件の二茶人と花逢
 春を搦捕せ、樓上に閉籠したりしを、梁和が計にて、王
 宣慰と郭京のありやうし時、汪玉豹と看守の養娘等に
 蒙汗藥を飲して昏倒せし間に、素花の二茶人と花逢春
 を救ひ出し、弟李俊が元霄の燈籠を觀んとて、常

州の城内に入りし時、費保秋成と共に、呂太守に搦捕ら
 れ、牢内に在りしを、梁和が計にて、花逢春を王輔の子
 王朝恩に打扮せ、その餘のものは、侍伴當に打扮て、常州
 城に赴き、呂太守を欺き、捕籠て、思ひのまゝに計ひ、李
 俊と費保秋成を救ひ出し、弟李俊が陸祥張徳に
 去カされ、五百兩の銀子を失ひし時、穆春料り、弟李俊に
 再会して、張徳の妻と陸祥を斫殺し、件の銀子をと、復
 せし事あり、弟李俊が稱て、雙峰廟に宿りを求し、時三
 虎の悪棍竺大立等に搦捕られしを、穆春聞知て、悪棍等
 を刺撃し、竟に弟李俊を救ひ出し、弟李俊に去り去りに

第七回董信が疑似の罪案を受けて中都監に搦捕られ囚
車に架せられし時ゆかり、を梁廷玉等知りて孫
立庵成阮少七と俱に五百人の婁羅を領て去向に埋伏
し中都監を撃走らしめて董信を救ひとりぬこの段は是
前傳に燕順等が宋江と花榮を救ひし舊稿也八回柴進
は高源に搦捕られし滄州の牢内に在り李應等これに
聞きて柴進を救ひ出さんとて滄州城を攻し時高源
別節級牢子に分付て柴進を殺せし時節級吉孚
といひぬもの柴進を憐みしその夜件の牢子等に蒙汗
藥を飲し昏倒させし柴進を救ひ出し先唐牛児が家に

このゆせて後に李應に連累しにきこの段はとりも直
す前傳の故態にこそこの趣を易へたるなり第二回盧
俊徳の妻莫氏その女兒と共に金堂に拿れしを燕青二
人の銀子をもて辛くしこ救ひ出しにき第四回関勝が劉
豫を諫めて獄に繋れ既に斬られんとしつると燕青
金の使に打扮し金堂に混入して得出かたかりし時宋安
欺き関勝とその家眷を救ふて飲馬川へ遣しぬ第五回
呼延灼徐晟が金堂に混入して得出かたかりし時宋安
平に名をかりあふて三人俱に脱れ去りしは便是自救也
第八回宋清夫婦と朱金堂に捕籠られし時燕

國書刊行會

青か計によりて曾世雄を殺してその兵を嚮導にし
好漢等城に入り中都並を撃捕て宋清宋公を救ひにき
九第世呂小姐の百足虫に掠略せられし時呼延鉉徐晟等
百足虫を斫殺して呂小姐を救ひとり八第世十雷婆々
かその姪の光棍錢歪嘴の家に従使せられて在りける
左宋公楊林等錢歪嘴並にその妻毒悪も斫殺して
雷婆々を救ひとり九第世見よ一し一部四十回の内二
十九回まじり人の危難を救ふこと十六番ありこの内
財物とり復せし事二番意成と薛あり又蒙汗藥を用
ひし事三番也就中秦花二蒸人の王宣慰の樓上にとり

籠りれど逼迫せられし爲体は前傳林冲の妻の高衙内
に逼迫せられし故態也又董信か囚車を孫立欒廷玉等
に救れしは前傳に燕順か宋江花榮を救ひとりし故態
也これらの事は上にもいひに又柴進か滄州軍の一
回は人もかはらば前傳の趣をふた、ひ見するか如く
但高深は兄高廉の如く釘術をよくせざりしと吉孚の
幫助のみ増補の文也後傳の作者かこの如く故意前傳
の舊稿を模擬せしは看官に愛敬ありせんとの爲なる
わけれども人の厄難を救ひし事の前傳に多く見えだ
るもか中に林冲と盧俊義の事などは趣粗相似たり然

るを後傳に故意似つかはしく綴り及して東江の小鰲
山を觀んとて禍に及らしを燒直して李俊が常州の元
帝燈を觀て禍に及る事などのめづりしけなきの十
にありす李俊が人からに似けなくとせりとてはるる
とし世に妙作の舊聲を剽竊して落を東人と欲するも
のは當今この間にもなきにあらぬと換骨奪胎の工緻
なるに及す新奇の趣向は出来ぬに及この作者の才を
もて前傳の舊稿にのみ倣ひしはこゝろ得かたし蔡襄
が新評にその事をしも譽するは幫助の曲筆なれば甘
心しかたし知らず僻言ならんかも評三十五

飲馬川登雲山の好漢軍家眷徒類三千五百の兵と僕に
大洋に乗り浮め各船金鰲嶋をさしてゆくこと五六日
にして黑夜に方位をとり失ひ日本國薩摩州の岸近く
来ぬるとき和入船内の財物を利せんとて許多の小船
を来走りし推取筆で撃んとせしを李應燕青繁延玉等
の衆好漢連りに防げとも物ともせず凌振大砲を連放
ちて和入の小船を盡粉に存せとも和入は存ほも退か
ず李應等身方屯うし存はんことを怖れて事の情を問
するに和入の内中に通事ありて則意趣を報しかば李
應その二、ろを得て一牛はかりの和入等に納銀五百

足棉布五百疋を分賞し又通事にも細段四疋棉布四疋
を引出物として日本船を退かせ、纔に無事を整へて清
水澳に到りしといふ段に薩摩の海岸より才に兩日に
して清水澳に着岸せしとあるはあまりにはわからず
也この日本人の乱妨の爲体は明の時日本より唐山の
海濱近き州縣に船をとせし乱妨したることあるはか
ゝる物かたきを作り設けて後回に日本より関白を大
將にして薩頭陀の援兵にせし伏線にしたる也しかれ
とも天朝は邊境の細民まじも武勇の外國に勝れし事
隠れおぼるもありされは李應等三千五百の兵をも

國書刊行會

て捷を取ることかなはず千疋の細段棉布を贈りて和
解を以れたるよしに作りたり便是皇國人の武勇には
評かたきよしある也評三十六
第三十一回以下暹羅國の事を寫したるその中に暹羅
王馬竇真是漢の伏波將軍馬援加後裔也といひ王妃蕭
氏の父は宋の參知政事なりしを章惇丞相に陷害せら
れて儋州に安置の後逃れ暹羅に至りて女兒を馬竇
真の妻にせしなりしは第十二回後に玉芝公主を
もて花逢春に妻あはすと云ふ種に嫌ひあるは也明
人は胡元の夷狄に懲りて胡元は唐山の服色を改め友

國書刊行會

かゝる筆すさみにも云々と寫したれども今の清主は
韃種の部落にて又服色を改め頭先を剃たれはいか
いはせん是筆によりても彼の人の今も明の世をなつ
かしく思ふこと精す也とて国主遊山の段に明板
の原本には萬壽山宗廟の但見あるを重訂本には削去
りたり佳句なき中々に蔡昊の意に愜はぬにてもあり
んか上にもいへる如く古書を悉に筆削せしはよかり
ぬ事也とて国主三奠の時幣帛焚化の火飛上り国主の
肩に落かりりて衣籠の袍を焦し又道士徐神翁に遇着
して出家の功德を説れ四句の偈語をもて後東の凶兆

を示されし事などはみな後回の伏線なればしかある
べき也この段重訂本には多く文を易たりかして暹
羅の丞相共濤は年東逆謀ありとて一とも嚮には勇臣
吞珪に憚りて果さず吞珪の死後には又駙馬苑逢春宋
の大將軍李俊に憚りてありけりにて天竺より來つると
聞えし悪僧薩頭陀に遇着してよりその羽翼を得て府
内に留め腹心と頼みて日毎に厚く嘗待す段に共濤は
玉芝公主の色に愛想を焦して云々とある條下の細評
に奸人做壞事多是從財色上來共濤謀篡還未起頭就先
想着玉芝公主寫得極豫といへれど共濤も十六七の女

國書刊行會

見おれは年歳既に四五十年に及ぶを逆謀の時色
徳を先にしたるはこの間の淨瑠璃本めきたり薩頭陀も
亦其壽の女兒に掛想して後竟に本意を遂たれども他
は出家人の事なれば色中の餓鬼也其壽とは格別なる
よし評三十七

薩頭陀は幻術あり又丹藥を其壽に薦めし他は徳に充
たれば後に國主を毒殺の伏線也又其壽の薩頭陀に國
主太子李俊花逢春を呪す故上用一木人長六寸三分
取本人年甲安在木人腹中把七隻绣花針將木人的七釘
釘住了毎日清晨燒一道符晚上奠羹飯再秘咒若是平

人七日必死若是福厚貴重人亦要三七也必要死とあ
るはこの間の雜劇にこそ有る彙人形といふものに似
たりこの魔厭鬼法只七歳の太子の女死して國主と李
俊花逢春は恙なし是福厚く貴重なる故なればとも蔡昊
か評に見えたりか如く太子を殺して國主の統を絶さ
れば李俊を王にしかたしんば乃て其言の息平二カ昇
俞道婆後有鐵道婆俱行此術俗名拜樟神其術取樟木刻
為人形約三寸餘取人家少兒聰俊者竊得其年甲書符納
于木人腹中用符咒拜祭七日其兒即死二孽前後俱為太

國書刊行會

見おれは年歳既に四五十年に及ぶを逆謀の時色
徳を先にしたるはこの間の淨瑠璃本めきたり薩頭陀も
亦其講の女兒に掛想して後竟に本意を遂たれども他
は出家人の事なれば色中の餓鬼也其講とは格別なす
し評三十七

薩頭陀は幻術あり又其講を其講に薦めし他は徳に充
たるとは後に国主を毒殺の伏線也又其講は薩頭陀に国
主太子李俊花逢春を呪す故上用一木人長六寸三分
取本人年甲寅在木人腹中把七隻绣花針将木人的七穀
釘住了毎日清晨燒一道符晚上奠羹飯再秘呪若是平

人七日必死若是福厚貴重人亦要三七也必要死とあ
るはこの間の雜劇にこそ有る粟人形といふものに似
たりこの魔厭鬼法只七歳の太子の女死して国主と李
俊花逢春は恙なし是福厚く貴重なる故なればとも蔡昊
か評に見えたりか如く太子を殺して国主の統を絶さ
れば李俊を王にしかたければ也又蔡昊か總評に獻勝
之術從來有之日無論書傳所載本朝康熙年間吾邑前有
俞道婆後有鐵道婆俱行此術俗名拜樟神其術取樟木刻
為人形約三寸餘取人家小兒聰俊者竊得其年甲寅符納
于木人腹中用符咒拜祭七日其兒即死二孽前後俱為太

太 納 刻 有 獻 勝 紀 矣 李 似 矣

走 平 歟 分 國 充 子 他 也 色

且當作但是筆工誤寫無疑
ハニ行ニ割注ニスハニ

宇所斃予曾親見其案牘此處寫薩頭陀斃法不為荒唐誣
誕也といへりか、此はこの間の雜劇にてすなる調伏
の象人形も必是本據ある事也 評三十八
薩頭陀の斃法に李俊の年甲の知りかたきを、長壽は病
りしにこの年五月五日に李俊は四十歳の賀筵を開く
よし聞えしかば、此にこの年甲の知れたりとあるは、い
とよししかれども、前傳宋江等は十六年の間梁山泊に
在りしよしにおほえたり、招安の後遼を討ち方臘を征
せし歲月はやくとも五六年に及ぶよし、又李俊が退隱
して金鰲嶋を撃とりしまで、年序をめさぬとも四五

倭ノ下指
字ヲ脱セ
レテラセ

年は歴たりけんかゝて暹羅王と和議成りて、葉賀の筵
を開くまで、又兩三年を過せしならん、此を合して倭
此は無慮二十八九年也、しかるにこのとき李俊は四十
歳なりんには、宋江と初て面會せし頃は十四五歳の後
生なりし、前傳に李俊の年歳の事は見えぬも、宋江
と相識になりしときさゆかりの後生なりとはおもは
れ、必是三十前後の人なりけん、にこの時四十の賀は
年紀合ざるに似たり、五十歳の賀にせば相應じかるべ
きを、さては後に聞換章の女兒を娶りて、妃にしつる時
夫婦の年歳大く過不及あるは、四十歳にしつるに、
夫

其の如く悪僧なれば人を殺す丹薬をも野へ〇〇人
 その事なすとすべかり評四十
 其清は執逆の後いく程もなく位を正さんとせし時に
 大臣はみな参賀せず其清怒て不参の大臣五十餘名を
 殺すとあるを蔡昊が評にいへることは李俊が王
 諷ありこの故に薩頭陀とて城の薩頭陀素練此
 の兄弟が五千の苗兵を將て董茅嶋に在りしを喚ぶ也
 乙資助にしたりあて五月五日に其清が国主を請待
 せし折に薩頭陀は長生不死の仙丹也とりつはる唱へ
 乙大毒の丸薬を国主に薦めて即坐に斃し又供奉の禱

将をば幻術をもて撃走らせし段の細評に頭陀素練此
 藥不知作何用處といひしは理屈也是より先に李應等
 が蔡童高の奸心を毒殺せし折もこの用意あるべ
 人もありずしかれども軍用には毒物なりとも携ふべ
 し薩頭陀も亦しかたう良醫は敗鼓の革をしも野へ〇〇人
 いへる如く悪僧なれば人を殺す丹薬をも野へ〇〇人
 その事なすとすべかり評四十
 其清は執逆の後いく程もなく位を正さんとせし時に
 大臣はみな参賀せず其清怒て不参の大臣五十餘名を
 殺すとあるを蔡昊が評にいへることは李俊が王

かゝては後を守りし前を忘れたりとやいはん後先夫
少妻存りとも五十歳にせばいよ／＼評
三十九

花逢春は高青倪雲と俱に李俊が四十の壽筭を慶賀の
爲に鷺嶋へ赴きし比共濟は薩頭陀と相計て叛逆の密
談ありこの故に薩頭陀は占城の革鴨革鷄といふ三個
の兄弟が五千の苗兵を將て董茅嶋に在りしを喚ぶ也
乙資助タスケにしたりかゝて五月五日に共濟が国王を請待
せし折に薩頭陀は長生不死老の仙丹也といつはり唱へ
乙大毒の丸薬を国王に薦めて即坐に斃し又供奉の禱

將をば幻術をも乙撃走らせし段の細評に頭陀素練此
薬不知作何用處といひしは理屈也是より先に李應等
が蔡童高の奸心臣を毒殺せし折もこの用の意あるべ
くもあらずしかれども軍用には毒物存りとも獲ふべ
し薩頭陀も亦しかたう良醫は敗鼓の革をしも野ノと
いへる如く悪僧なれば人を殺す丹薬をも野へノ人
その事なしとすべかり評四十
共濟は叛逆の後い／＼程もなく位を正さんとせし時に
大臣はみな參賀せず共濟怒て不参の大臣五十餘名を
殺すとあるを蔡昊が評にいへることは李俊が王

練此 應筆 ぶべ ぶと 人

先夫 雙の 密 三個 占也 請待 唱 禪

宋の徽宗は崇寧元年より宣和七年迄在位二十四ヶ年也且宣和二年に方臘が伏誅せしより金兵入寇二帝北逃すて纒に六年也此も亦後傳の正とき趣向の立さまたは年紀おはずしかれども作りもの語存水は少すし孝俊の年紀はのかれかたか

辨三十九

にたるときにをさく衆兄弟を任用の障りにたると
君にしか作り做したる也しかれども初より暹羅の大
臣の姓名を一人たもあらはさず刺大家を束ねて逆
臣の爲に屠りれしはあつべき事ともおもはえずそか
中に五人精忠のものありて芳濤と戦ひしを薩頭陀
か幻術にてそれらも撃れたりといはれ今此に趣ある
つし又芳濤か薩頭陀と俱に後宮に入らんとせしに陡
に昏倒したりしかは怖れてふた、い後宮へ入らんと欲
せよこの故に国母も公主もなほ後宮に在て恙なしと
いへるも何の故なることを知らず国母も公主も逆臣

に汚されずは後宮を脱れ出て片山里にしのぶとも事
の障りはあるまいく且おはれなる物かたりもいひ東
へきに只李俊等のう一をの子女としてその餘の事を
省んところか風情もなく作りし也評四十一
国主被せられし後蘭妃玉芝公主の夢に見えし後來の
事を告ぐ段に我不聽良言誤遭毒手今隨丹霞師又出
家例也道途自在とある條下の細評に做鬼出家千古奇
事といへるは嗤得といとよし国主又いふ宮中に有金
甲神人守住賊臣不敢進來你母子且自寛心といひしも
こゝろ得かたし金甲の神人常に宮中を守る靈驗あり

何と太子の魔死せられしを救さる何と国主の毒殺
 せられしを救さるこの金甲神国王と太子を見殺にし
 て国母と公主をのみ守らんにはその故なくはあらず
 かりふそのゆゑを鳴さるは作者のこゝろ国母と公主
 を舊の儘に官中に指んたれば作りさま浅はかにこ
 理りたらず聞ゆる也この間にも拙き作にはかゝる俗
 筆なきにあらぬとこの作者には似けなきわさ也評四
 十一
 花逢春の暹羅へかゝる途中船中に共済の弑逆の上
 しを聞知りて驚き哀み高青倪雲と俱に金鰲嶋より撃

て出て共済を攻ると薩頭陀よく兵法に通じて且妖術
 あり加之華鵬兄弟三人萬夫不當の勇ありて五千の軍
 兵よく戦へば李俊等屢敗斃して明珠嶋に退きし時又
 頭陀に火攻せられて煙死とせし折に嘉雨忽然と降る
 きて料らず必死を脱れしは便是三國志演義なる可
 馬仲連父子が胡蘆谷の剽竊摸擬也小程に李俊等は卒
 として金鰲嶋に退きしを薩頭陀華鵬兄弟進てこれを
 攻撃つ段に李俊等が頭陀の幻術を折んとて準備せし
 汚穢の物の別船に在りて用ゐたかりしはいとよし
 李俊が戦船利を失ひて又退きて城を守るこの時童威

高青等四人の戦船敗走して城に入ること克はすより
 て暹羅城の空虚なるを驚んとて三百名の残兵を領て
 暹羅に到りしに共濟鵬等用心繁しければ城を攻捕る
 によしなしこの時高青は守城の百姓和合兒の内應に
 よりて獨しの心入ることを得て城を焼んと謀りしか
 とも華鵬が由断なくうち巡るによりその事克はす高
 青遂に宮中に到りて国母公主に見参て李俊が国主の
 宮に義兵を起して花逢春と共に薩頭陀と戦ふよし
 を告まうし是より宮中に留りて再較計を作とあるは
 いかにもおゆ中暹羅國を守る共濟が後宮とは胡越

のどとく高青かしのび入て數日逗留せしを知らざ
 りれば那金甲神の擁護にてもあるわけれどあまりト
 そらくし今この間なる合巻草紙の趣向に似た
 りかてこの時李應梁延玉等が海鯨船清水澳に着し
 かばこの地を守る李俊が將官瘦腹熊杖成出迎へて暹
 羅國の逆乱并に李俊が戦ひ難義のよしを告知せ金鰲
 嶋へ注進の後李應等の衆好漢金鰲嶋に到りて李俊梁和
 等に對面し述上姓時の胸臆を叙る彼は皆あるべき処
 にて評するに及はす是よりの後公孫勝薩頭陀の幻術
 を破る衆好漢李俊と共に暹羅を攻るとき共濟相れ

計を頭陀に問ふ薩頭陀この機に乗じて芝濤の女兒を
 妻とすこの時高青宮中におり夜分火を拜て暗狽とす
 城遂に破れて李俊花蓮春等芝濤并に家口四十餘人を
 誅戮して宮中に到り国母公主を慰問し又華鵬を殺す
 薩頭陀は逃亡て往方を知らず是より先に華鵬は築延
 玉に撃れたり獨草鵬は薩頭陀の指揮により日本國に
 赴きて兵を備んとせばや東海へ去りしかは敗頭陀か
 比也金鵬より三十四回廿一丁左廿二右この鋒とぎを
 免れたりかゝて樊瑞樂和燕青徐晟等冬慶を査訪して
 薩頭陀を拿んと欲す第三日に鎮海寺に到りて塔下に

商議す薩頭陀はゆる比より芝濤の女兒を携て塔の
 頂上第一層に躲れとせり芝濤の女兒頭陀を怨みて戒
 刀を塔下に落して頭陀を搦捕りせよしを云々と訴へ
 その身も共に縛縛りたるこの段の本父に原東薩頭陀鞋
 會妖法却不曾騰雲とあるはこの間の俗にいいふ進口狀
 也頭陀飛騰の術あるは躲れて塔上におるべかりずし
 かれともかくてはおまりに脱かり芝濤頭陀の亡る処
 なほ手つよく作なさは新奇の趣向もあるべきに總て
 あるべき趣向に存なくと味薄かりとてこの三十三
 回三十四回は重訂本に文を易たる処特に多かりたり

とも事の同じければ異同を正すと及は本頭陀芝濤伏
誅して後に李俊等国王の大業を執行ふ礼也との、古
国母は李俊等の衆好漢を召聚て国位の事を議せり、
李俊は花駙馬上讓り、施達春帝に衆好漢は李俊を推し
て國位を踐めとしふ事とふく定りて大家退散すし
かれとも李俊はいふた正位に即かず存ほ元帥府に在
て國事を行ふの、作者のこゝろ國体を張んと欲す故
に李俊を速に王にせず後に宋の冊封を受て真王に也
ん為也、試に問ふ、此間の戯作者にあり、理義をわき
まへたるもの、今も昔もあり、女なしと看官と、らに意

をといめて、芝と不學を分別せば、巧拙を知る捷徑存り
し、評四十二

芝濤薩頭陀が梟首とられし時、芝濤の女児も斬り、
かりしを徐晟が請ふよしあるをもて、なほ獄に繋る大
り、こは後に大赦の時、郭哥の妻にせんとして也、はじめ徐
晟が江忠の酒店にて郭哥が妻を娶りせんと約束せし
事あるによれりとれも亦前傳に宋江に一丈青を玉簪
虎に妻せて前約を果せし舊稿也、郭哥の事にはわかあ
もふよしもあるを、とは武松の事の評中に具にす、し
李俊は攝位に居るとい、其衆將臣の職、位置を定め

大り第一柴進第二公孫勝以下略すこの條原本の龍頭
評上官制參用列代通俗演義とあり又西洋海記も是には
書名三寶大盜西洋記通俗演義といふ通俗といふ事明
より上には所見なしこのころよりの俗稱なり一評
四十三

華鵬か日本の兵を借りてかへり来る故に日本國在大
海島中綿亘數千里管轄十二州多出金銀珍異之物其人
雖好詩書古玩却貪詐好殺又名倭國十二州共有十萬兵
虎踞海外と見えたりこの十二州は薩摩十二嶋をいふ
歟とらふは筑前筑後肥前肥後豊前豊後日向大隅臺岐

薩摩國防長門の十二州を云ふ歟とら得かたし又云
日本國乃秦始皇時徐福到海中取長生不死之藥帶有童
男童女百工技藝醫巫卜筮有數千人因始皇暴虐徐福避
地于此開創起來といひ唐山にて普通の謬説なり此は
辨ずとも足りぬ事也清土至て才にその証証を知り
たふ歟重訂本にはこの五十三言を削去りにきこれら
は蔡旻本勝りたり又云原來関白是日本大将の官稱取
每事都要関白他的意思不是姓名那関白身長八尺勇力
過人領和王令点薩摩大隅二州之兵共是一萬戰船三百
孫祭旗開洋こ、ト以小関白は豊大閣の事を聞かぬま

國書刊行會

古人は石曼子を描すに似たり笑ふべし明史に鳴津華
 鵬は和兵を引てかへり来て共清薩頭陀の撃れたりよ
 しを聞知りて青電嶋の嶋長鐵羅漢及屠崆余漏の嶋長
 と謀し合せ和兵の射して暹羅の城を囲む那関白果然
 足智多謀和兵勇猛應接に暇あらず李俊衆將官を部し
 て日夜提防急らず兩軍のまだ鋒を交せりし時関白黒
 鬼に暹羅の戦船の底を穿しむこの故に李俊の水軍利
 を失ふて城に籠りたり那黒鬼可以晝夜在水中創殺時
 就捕魚蝦生食関白叫去鑿穿船底とある黒鬼は蝦夷を
 いふなりん又云関白騎一隻白象盤頭結髮手執鐵骨原

殺過來と関白の白象これ最笑ふべし華鵬已に東門を
 攻破りし時燕青則華鵬の肩を射ていまた死なず竟に
 花逢春に刺殺さるこれによりて和兵も圍みを解きてこ

のは... 関白... 華鵬... 燕青... 花逢春... 和兵... 圍み... 解きて...
 下... 時... 燕青... 華鵬... 肩... 射... 死... 竟...
 花逢春... 刺殺... 和兵... 圍み... 解きて...
 暖の地方といへどもなほ寒不きらすじて冬を凌ぐこ
 とを得ず原是無経の高言に係るものかり又只井蛙の

暖の地方といへどもなほ寒不きらすじて冬を凌ぐこ
 とを得ず原是無経の高言に係るものかり又只井蛙の

古人は石曼子を描すに似たり笑ふべし明史に嶋津華
 嶋津和兵を引てかへり来て其清薩頭陀の撃れたるよ
 しを聞知りて青電嶋の嶋長鐵羅漢及屠崆余漏の嶋長
 と謀し合せ和兵の魁して暹羅の城を囲む那関白果然
 足智多謀和兵勇猛應接に暇あらず李俊衆將官を部し
 て日夜提防急らず兩軍のまだ鋒を交せりし時関白黒
 鬼に暹羅の戦船の底を穿しむこの故に李俊の水軍利
 を失ふて城に籠りたり那黒鬼可以晝夜在水中飢餓時
 就捕魚蝦生食関白叫去蟹穿船底とある黒鬼は蝦夷を
 いふなりん又云関白騎一隻白象盤頭結髮手執鐵骨原

殺過來と関白の白象これ最笑ふべし華嶋已に東洲を
 攻破りし時燕青則華嶋の肩を射てりまた死なず竟に
 花逢春に刺殺せりこれによりて和兵も圍みを解きて
 退く時公孫勝風を禱り暹羅南暖の地方には未曾有な
 る大雪を降りせしかは和兵遂に水寨を結ふことを得
 ずこの時李俊等加軍議の故に那和兵只怕冷不怕熱從
 來沒有寒衣况是秋天到的當得這般寒冷縮做一團凍死
 無數とあるは笑ふべき也玩球なとは常に温
 暖の地方といへどもなほ寒衣あらずして冬を凌ぐこ
 とを得ず原是無経の寓言に係るものから又只井蛙の

の 二 温 死 徒 得 存 心 老

原 人 在 時 利 日 黒 不 然 長 上 華

六 和 兵 の み に あ り 初 かの 黒 鬼 と 共に 凍 死 せ し と あり
 は り よ く 笑 せ べき の 甚 し き 也 野 作 人 は 毎 に 雪 に 埋
 北 へ も 死 せ る も の 也 公 孫 勝 雲 を 以 り て 亦 り せ ず と
 も 大 暴 風 を 以 り 初 して 船 を 覆 さ ば 半 か ら ず と 全
 勝 を 得 べ し と 琴 嶺 かい の 山 へ ぎ

國書刊行會
曉説也。唐人等加往々天朝の風土を説くにはあゝる説
件多くあり。彼の書傳に載たふ外國の事もこれをもて
その謬りの勤からぬを知ふ。しかるにこの大聖にて
水も氷柱になりしかば。閼白をばじぬとして。一萬の和
兵。黒鬼と共に凍死して。水晶人のごとく。氷裏にありて
僵々たり。只閼白の騎りたる白鬃の女死なすと。いふこ
の白象は。足利義滿の時。南越國より。白象を貢獻せし事
ありしを傳聞て。かゝの如く作成したるに。や。柳明清の
稗策に。往々皇國人の船を寄せて。吳楚の州縣を擾乱せ
しを。歴にしつゝ。よしを作り。設けて。愉快の事とす。なる

は昔年南北朝の内乱より。竟に戦國になりし。比鎮西の
浮流人。勇悍なるものども。吳楚の間。赴きて。乱妨甚し
かりければ。足利義滿の時。明朝より。乱妨人を制し。及ば
ず。しと。り。ひ。お。こ。したる事ありし也。是より。以来。近世
濃國の落人に至るまで。唐山の海岸に推よせ。て。人民を
屠り。財貨を豪奪せし事。既に。歲月を累。泊。て。甚しかりし
かば。稗史に。和兵を歴にも。なるよしを作り。こ。その。慣。を
決せし也。清の逸。田。史。か。女。仙。外。史。にも。和。兵。侵。犯。の。寫。体
を。寫。じ。て。唐。蹇。見。か。歴。下。の。女。仙。の。和。兵。に。輪。焉。せ。り。此。て
遂に。死。に。至。り。し。事。并。に。和。兵。を。剿。滅。せ。し。よ。し。を。作。り。設

たゞは亦是和乱の時の恥を盡め憤りをもらん爲也
かの身來の乱妨は皆是落人浮浪人などの所爲にて且
外國へ推渡りての事なれば却て皇國にては是を知ら
ず故に書傳に載せしものなけれども和乱の爲体は明
史に詳に見えたりその餘五雜組以下の十談にも多く
和乱の事を載せたれば彼の書策を見てさもありつら
んと想像するのみ只この後傳と女仙外史のみにあり
ず唐山の釋談に件の趣を撮合して作設けしもの多く
所見ありしかど忘れたれば書名を擧げすこのこと、ろ
を得て見るときはその情おのづから亮然たるとし書

成于憤といひしものなりことにもあるべからん一笑
千笑 評四十四

これより先に青電嶋の鐵羅漢并に屠峯余漏の嶋長は
華鵬が戦没したるを聞傳て今夜は先安息して翌南門
を攻んとて酒を取て痛飲して醉臥したる折關勝等に
夜討せられ逃て本嶋に回りしはしかにぞや華鵬死
して切を成さず身方の不利を聞ながら用心に急りて
酒を飲み醉臥して立足もなく敗北せしは理のあかす
べき所也是より下第三十六回は李俊が諸大將を分ち
遣りて青電屠峯余漏の三嶋長を征伐しぬる段にてさ

る奇計なれば評するに及ばず。か中に樂延玉、扈民の鐵羅漢を討滅す時、士卒毒水を飲て死なんとせしを安道全誨へて甘草湯をもて毒を解瀉せし事あり。三嶋長の各々洞内に逃籠りしも、みな似たり趣也。鐵羅漢は樂延玉に燒殺せられけり。又宋公董信穆春は釣奥嶋に余漏天を割滅しつる彼の土産物に巴豕といふ大蛇あり。その肉美にして補益長壽の薬とす。此條の細評ト、こは釣漁の陪襯也といへり。この他の土宜も多きは作り言なす。し又関勝楊林董猛等か屠嶮を討滅す。彼に嶋長石洞中に閉籠りたれば、攻ることを得ざりしに屠嶮か

愛妾ト秀姑といふ美婦あり。父は揚州の人トて方明と喚做すもの也。楊林料らばこの方明の手引によつて俱に洞内に入ることを得て、且秀姑か盗せたりて屠嶮か酒に酔臥せし時、その首を捕て出て関勝に報知りし。屠嶮の妻并に類を割滅す。この方明文女を揚州の人にせしは、後ト秀姑を楊林の妻にせん。為なれども秀姑は嚮に屠嶮に掠奪せられ、遂にその側室にたりて久し。嘗てせられしかば、蠻種なりずも無垢の婦人にあり。楊林その功德を感して、これを娶らば今さら素生に拘るべきにあらずも。しその蠻種なりざるを喜ば

國書刊行會

國書刊行會

は鉾首せざることを得かたかるべし又後回諸將官の妻を娶ふ故に再娶は蠻女も嫌はざりしは宋國の女人足りざる故也作者の用心後に至りてか人の心とく窮するをかをしき也 評四十五

第三十七回徐神翁題詩の一事は前回暹羅王春遊の照對也牡蠣灘に李俊等高宗の駕を救ふ一事は李俊既に王位を踐むといへども未だ宋の天子に一介の功績なきこの故に牡蠣灘の故事を撮合して忠義の勲功を全ふして遂に冊封の正位を明かにして句を結ぶ也原來暹羅の屬嶋に金鰲嶋と喚ぶは存し蔡昊の第三十

七回の評に云按利傳高宗因金兵陷臨安遂航海移温台舟淺干牡蠣灘灘之上有金鰲山山上有金鰲閣閣上有徐神翁詩與在潛邸所得道士詩合即本傳所載之詩也金鰲乃山名閣名非嶋名在台州府境内亦不屬暹羅本傳乃借用耳この評精細にしてその事實を釋するに足れり本傳に録いたる暹羅の屬嶋二十四嶋も虚實相半ならず且暹羅より唐山へ往還のいと遠なるは作者筆力を省ん為たさるべしいぬる庚辰年陸奥州伊閉郡磯嶋村の清吉等十二人赤裸島に漂流し赤裸島より暹羅に到り暹羅より清國福建に到り福建より護送せり此乙卯戌年秋

八月長崎に届れりその間七ヶ年を歴し五人は死し七
 人帰朝すその暹羅より清の福建に到る海上の日子木
 傳に作る如く速なる事にあらず又長崎より暹羅へ到
 る水行の里数は天竺徳兵衛記に見えたり是も亦本傳
 に作りし如く速なる事にあらず本傳には薩摩澳より
 暹羅の属嶋清水澳へ纒に兩日に到りしよしをい
 り作り物語はかゝる事多かれども就中本傳は暹羅を
 もて宋の附庸とすこの故に金鰲山を金鰲嶋に作り更
 てその往還を近くしたり作者の心外夷を厭へば宋と
 暹羅と遠からず彼此一世界にしたり也 評四十六

李俊暹羅を一統してふたゝが金鰲嶋に到る時に道士
 徐神翁酒宴の席上に來臨して詩を賦し仙術をおこな
 すその為体三國の時の左慈に似たり曰みさせし趣友
 し李俊諸將官と共に牡蠣灘に到て金兵を討退し遂に
 高宗の御駕を救ひて金鰲嶋へ俱しまねり也王朝恩趙
 嗣良が金朝へ投降して嚮導たりしを生物り來て罰棍
 各八十高宗臨安へ回り玉ふの後死罪に處せんとある
 は勸懲に本づく也就中趙嗣良は全國の禍を開きたる
 その罪王朝恩に十倍すその死刑の光景をも詳に寫さ
 ばいよく宜しかりんにその死を^寫漏せしを看官

飽ぬ心地すべしこの時高宗の徐神翁の詩を見よ云々
 の事は蔡昊の評にいへるごとく故事ありそを作者の
 撮合しつる也高宗遣羅國上到りて新春の朝賀を受る
 とあるは上に評せしごとく果と暹羅を肝膽厚齒の一
 世界にいたる也異日大臣に勅書を齎して文武の大臣
 を封拜すべき状しを宣示して高宗明州へかへり玉ふ
 までさして評すべき事なし高宗暹羅に在りし程果の
 群臣知るよしなけれは驚き憂ひてその往方を常収奉
 るとしふことも聞えずこゝりは何の手抓みにて漢作
 者の疎因かゝる事多かり評四十七

柴進燕青樂和蘭讓呼延灼李應孫立徐晟等二千の兵を
 領て高宗を送りて臨安に到り西湖の昭慶寺に寄宿し
 て勅命を候ふ彼兼に西湖の景致を歴覧して六和塔に
 て武松と再會し各々舊時を相譚ふ彼は趣なきにあら
 ぬとも前傳事足りぬ心地とす武松は廢人にせりし
 故に浮世を遁れしものなれとも前傳好漢中の巨擘也
 李應孫立燕青等の數人いまだ暹羅に到りぬる以前に
 武松と再會して談合敵にたす事ありは彼のつゝ作し
 さまなほあるべし但孟太後の懿旨ありて臨安城中に
 大相國寺を移し建ふに及て武行者を請ふて國師とし

魯知深一汎の法脈着實興旺といふが如きは武松の真面目にあり本作者の用心すべし時俗の快心を旨とせしのみ又おもふに郭哥は前傳武大良の事に就きて武松に因みあるもの也と云ふを本傳に賦松と再會の文友きは遺憾也この時郭哥は徐晟の從者になりて候上臨安に來て武松に對面し武大金蓮の舊話に及ばし以下く看官の感深かるといふかして郭哥も武松に從ひて出家得度して暹羅にありたりは他か江忠の食客となりて蒙汗藥をもて旅客を引利せし罪障消滅のよすがとなりて共濟の女兒を娶ふに勝るべししかの

共濟の女兒は薩頭陀を恨むにあり竊に燕青樂和等に頭陀が塔上に隠れをるを知せたるその功あるに似たりどもはじめ共濟が國主を弑逆の時一言親を諫めたることもなくその後父の命により頭陀の妻になりて及て又推辭の事もありずかして父共濟が伏誅の後頭陀をうらみみて搦捕せたるも亦不義也とるを徐晟が郭哥の處に前約をたかすとして共濟の女兒の命乞して郭哥に妻せし事なれば就中甘しかたしか、此は郭哥は共濟の女兒を取りて武行者の徒弟になりはなほ一飯の光輝を増して前傳の對照にその宜しきを得んか

し又この時燕青柴進梁和蕭讓侯茂等が李獅々を討ひ
 しはすゞこ一事も漏すことなき亦是前段の末局なる
 にも凡この文武八員の官人は昔日の柴進燕青と異也
 国事によりて天子の勅命を候ふ身に大役を帯ながら
 西湖を遊覧なすだにも謹慎には疎かると舊妓李獅々
 と相會して忌憚ることなかりしはしかば也李獅々
 は燕青柴進に再會したるのみにして又その終る所詳
 ならずこの段などはなるともよしおりは作りおまな
 ほあるししかんては燕青柴進等は三風流の饅鬼にし
 て當今の人柄に似ゆなかるし評四十八

暹羅の君臣冊立封拜の勅使として宿大尉渡海の時柴
 進等文武八員嚮導たりこの勅使を宿大尉にせしは亦
 是前傳の末局也宿大尉は是より先にも安道全が汴京
 を亡命の時又聞煥章が焦面鬼の誣訴をいひとかん
 て汴京に到りしときも皆その底面鬼を仰ぎしは乃ち
 一部の繋ぎにて看官に遣水させじとの爲也こゝに至
 る宿大尉の宋江等を愛顧したる始あり終ありこの人
 なくはあゝべからずかんと又暹羅の君臣婚礼の段に
 至る聞煥章の女兒は李俊の妃に櫻配せり此呼延灼の
 女兒は徐晟に妻せり此呂小姐は呼延钰に妻せり此蘭

讓の女兒は宋安平に嫁し、盧俊徳の女兒は燕青に匹配
す。此の嫁娶の一段は、^トはしきに過さくたノ一し
ナレは、看官飽く心地す一し。李俊の聞か、小姐を娶りて後
故の暹羅王の妃蘭氏は、宮中を避けて、駙馬府に在り。蘭
妃極めて賢明にして、婦徳あり、始よりして一事もその
瑕疵を見ず。然るを李俊は、花駙馬上、諫らせし、みづか
り、国王に及れり。是わか嫌然たす所也。かゝて、又楊林が
方明の女兒秀姑を娶り、樂和が宮娥、吳采仙を娶りしも、
唐山人の女兒、なればともある。二きを、沙龍が外妾たり
し。兩個の蠻女を妾にして、つるは、いかなるこゝろ、むか

勝呼延灼等、数人は家眷あり、本傳に、関勝は子なしとす。
我思ふに、関勝は、関羽の後裔也といへば、看官の、題負餘
の好漢より、格別也。とるを子なきは、遺憾なり。一し。こは
正文の、隨に、関勝は、劉豫に害せられ、その子、関某あり。
武勇方略、父に劣らず。徐晃呼延鈺等に、似しく、後に、暹
羅に到るとありは、関勝が身に、恙なく、て却、^テ副の、なかり
ん、より、看官、愛た、く思ふべし。獨、関勝の、み、な、り、す。林、冲、兼
蓋、盧、俊、義、も、必、後、お、り、せ、た、き、も、の、也。兼、蓋、盧、俊、義、は、梁、山
泊に到るの後、家眷ある事の、聞え、ぬ、とも、そ、は、妾、腹、の、子
など、に、せ、は、作、り、さ、ま、い、く、ら、も、あ、ら、う、し。林、冲、は、妻、の、張

氏曼死して又娶らざれば子のあふべきよしなれば
 もこは檀園に見えたる鬼生朝奉の故事を撮合して林
 冲の孟州へ刺配せられし時その妻懐妊二ヶ月に及べ
 りいまだ分娩せずして曼死せしに家中なる七骸より
 男子出生す張敬頭その高俵に知られん事を怖れて他
 郷なる親族評遣して養はせしか成長して林某と喚做
 すなほ作らばいよ／＼看官の感深かるべし一百八人
 中にて林冲は殊さらば可愛き好漢也されば思ひかけ
 もなく林冲に子ありしよしに作りたる人には前傳に
 関りぬ星外の甲乙を多く加入せんよりは遂に優りて

愛たかるし後傳の作者これらの趣向に及ざりしは
 一百八人の取捨に厚薄ありと似たり又鼎蓋は梁山泊
 開起の好漢友を百八人の内に収りれざりしは後に
 宋江を寨主に做すに宜しかりされば也しかればも宜

和遺事及癸平辨論
 中興
 宋江
 梁山泊
 張敬頭
 檀園
 鬼生朝奉
 孟州
 刺配
 懐妊
 分娩
 高俵
 親族
 評遣
 養はせ
 成長
 喚做
 看官
 感深
 かるべし
 前傳
 優りて

初は廣俊義は宋江吳用等に託られて家産を失ひし當
 初の爲体を思へば可愛き漢也とか親族盧俊徳の女兒
 の燕青の妻になりたりたりはなほ飽ぬ心地ぞす

氏曼死して又娶らざれば子のあふべきよしなげれば
 もこは檀園に見えたる鬼生朝奉の故事を撮合して林
 冲の孟州へ刺配せられし時その妻懐妊二ヶ月に及べ
 りいまだ分娩せずして曼死せしに冢中なる七骸より
 男子出生す張教頭その高俵に知られん事を怖れて他
 郷なる親族評遣して養はせしか成長して林某と喚ば
 すと作らばいよ／＼看官の感深かるべし一百八人
 中に林冲は殊さらば可愛き好漢也されば思ひかけ
 もなく林冲の子ありしよしに作りたる人には前傳に
 関りぬ星外の甲乙を多く加入せんよりは遂に優りて

愛たかるし後傳の作者これらの趣向に及ざりしは
 一百八人の取捨に厚薄ありと似たり又晁蓋は梁山泊
 開起の好漢なるを百八人の内に収りれざりしは後に
 宋江を業主に做すに宜しかりされば也しかればも喧
 和遺事及癸平雜識に載たる宋江が大将三十六人の内
 中晁蓋ありて林冲なりしかは後傳に晁蓋の子を作
 り出して従道羅王に做すともその故なきとすべから
 ず又盧俊義は宋江吳用等に謀られて家産を失ひし當
 初の爲体を思へば可愛き漢也もか親族盧俊徳の女兒
 の燕青の妻にたりたりとみこはなほ飽ぬ心地ぞす

す兄當り作内宣に泊は

しに中人做他る、一林と

79

○再考宣和遺事には林冲あり

又云晁蓋の事は予も隱微評に評也後なきを同しとす

へし初按はしまた盡さるなり

詳

る凡この三好漢は必後ありせまほしきものに存ん評
四十九

高麗王李侯みづから暹羅國へ到來して李俊に拜面し
その同姓たるをもて結ぶて兄弟に存りて且公孫勝と
師弟の約束あり翌年國事を世子に譲りてふた、暹
羅の丹霞宮に來たり留りて生涯行ひ濟せしとある故
は蔡昊の評に見えたるごとく、これは高宗暹羅へ來ませ
しとき李俊にこゝろ得きして高麗王と謀し合して和
乱を防げといはれし事と安道全が高麗王の痲着の瘰
治をしたる照應なれどもあまりに人はしきに過ぎこ

とたししけれはこゝらはおらむと思ふまむに看
官に厭はるべし是より下國主四十二人の功臣と共に
元霄の燈を見る故は常州にて燈を見たる照應也この
宴会上文臣詩を献し梨園の子弟歡を呈する故原本に
は水滸記を演ずるとあり水滸記は宋江等百八人の事
を院本に作りたる也重訂本には定海記を演ずるとあり
定海記は周の美成學士の填詞にて虬髯公一代の事を
演出したる也水滸記はあまりに戯れに過ぎたるは蔡
昊筆削して定海記にしたる虬髯公一代の義氣行状よ
く李俊等のうへに似たるは也獨に柴進燕青等の臨安

安よ蔡を事にの看

きの療和せ皎暹とし評

80

①

李俊の水滸傳の演戲を觀て云々は作者のこゝろ唐の
太宗の故事に本つきし也蔡昊か切に筆削じて自ほめ
にはめしは却て思ひめ足りざる也

に到りしとき、倭人佛優を多く求めて、本國へ領てかへりこよしあよは、この宴會に用ひん爲也。後傳の作者約束を旨として、一事も漏さず、用心精細なふに似たり。もと李俊か暹羅を一統してより、後の物語一卷、第廿四回あり、此水を此間の俗に伽レリといふて嫌ふ也。カレリとは文勢脱して、餘事の長きに倦義也。其清薩頭陀か、或元して後傳一二回にてはやく局を結ぶを妙とす。かゝることとき、實にダレリといふし、しかれども、前傳の遣れを捉拾して、一人一事も漏さず、本傳に至て初て出世の人物の列傳も亦精細にて、大放ちなる陳腐の文

たし、唐山の作者には多く得かたき、細筆也。一部の趣向は上に評せしこと、く瑕疵なき事を得ず。予をもて、此を呂藻す。此は是中平の作にて、いまた上字を被け易かりず。しかれども、水滸の後傳なれば、十二分の愛敬あり。こゝをもて看官、此を喜するもの多かりし。評五十結局數行の文内、新舊二本多く異同あり。原本には、國主後至七旬、傳位世子也。到丹霞宮修道、壽至八十、無疾而終。衆公卿盡高年也。唯有公孫勝至一百二十歳、即解とあり。又重訂本には、國主政務之後、傳位世子也。云々、國主李俊直活到一百二十歳、無疾而終とあり。公孫勝は却八十餘

歳に乙戸解し李俊の壽一百二十歳に作すものはその
天壽星たれば也 評五十一

王進は前傳に是最初出世の好漢にて且高俅と對頭を
做したるも他を最初とす然るを前傳にその終る所を
詳にせず作者の腹内を推量するに忘ればたうにはあり
前傳には高俅かうへに惹なきをもて本意とすこの故
に最初その敵手なりし王進も亦惹ありずその終る所
を隠して具にせざりしなりん百八人の好漢皆緋袴な
きはありざるに王進にのみ緋袴なきは那カ一百八人と
一列ならぬを明す也か、此は後傳に王進の事を増補

すとも是を梁山泊殘剩の好漢等と一列にすこからず
我おもふに王進は當初母親に候して種師道経略云老種
に従んとてゆく道中にて路に迷ひて深山にわけ降り
降りて異人に邂逅して仙醴を飲て熟睡したる夢の中
に梁山泊なる宋江等一百八人の得失榮枯最後に李俊
か暹羅の王にたりし事まで見ることを得て母子共侶
に驚き覺て奇異のおもひをせざる事なしかんて路を
求め里に出て人に問ふに只一夢中と思ひたる光陰既
に五十餘年を経て南宋紹興の季にそありけるされは
那カ一百八人の事の趣も親子か見つる夢に違はずこ、

に人間の忠奸邪正榮枯得喪の理りを感悟して王進は
 又人と交らず更にも又母と悞に名山に隱れ道を修して
 ひとしく地仙となふことを得たりといふをもて局を
 結んで水滸傳前後一百六十回の科談を王進母子の夢
 に托せば世を誣俗を惑すなといふ迂儒の口を封まりし
 むるに足らんかゝる史進が王進に得再會しかたかり
 し縁由もここに至て分明なるべく事王進に始りて事
 王進に終りなれば照應も亦分明にして看官拍案贊美すべ
 し後傳の作者思ひこゝに及ばず王進をもて混江龍の
 將官に做したるはかへすくもうらみなり知らず僻

言なりんかも羅貫をなほ世に在しめて問ふくほしき
 事にもあけり評五十一

暹羅は大國也しかるにその國臣の姓名をあらはした
 るもの縁に三人金鰲嶋の守將沙龍大將軍吞瑤丞相共
 濟これのみ薩頭陀華鵬華鷗鐵羅漢余滿天屠煙の
 嶋長を加へて十人に過さず原是省筆の爲なりとも李
 俊等四十二人の敵射に足らず共濟薩頭陀が賊亡の彼
 に作りたまはるべし評五十二

公孫勝風雲の法術をもて大敵を剿滅したりこの彼蔡
 吳が總評云寫公孫勝建第一大功後面之享高爵厚爵方

為無愧真寫得好といへばさることながら勝は原來
方外の徒也その厚祿榮利を甘せばいふた俗を免れさ
るもの也かゝる二百二十歳にして尸解せんことは心も
となし評五十二
蔡昊の總評首卷第二十五別に後傳の文法を評解して
何かしの法に此かしの法といへるは前傳に金瑞か文
法を評解したる餘逆を砥れる也大約稗説を作ると文
の法則ある該なし況その名目を立て人に誨べきもの
にありす又臨て乍變高化蓮の糸を引く如く只その
作者の才に任して自然に妙文のいづれ来るもの存下に

後人その法則を弁てよと作らんと欲するとも得べき
事かはこれりの辯論はをさくその文を神にして曲
學なる後生を惑さんとこの所為也第三十四回の總評
にも大小數段の文法を評解したり是亦作者の求めて
一回に數段を作らしたるにあらざる覺おして勢ひ自然
に然るもの也文の法則にかりまれば無邊無量の稗説
を然られん也必しも信すべからず評五十四
前傳には百八人皆綽號あり後傳には新ト出るもの惡
人の外に綽號あることなしこれ亦前傳の作者の用
意にたかひたり按するに周密か癸辛雜識に載たる藝

聖英作東江三十六贊序曰余嘗以東江之所為雖不得自
 齒然其識性超卓有過人者立雖既不僭移名稱儼然猶猶
 軌轍雖託之記載可也續集上見之一東江等三十六人
 の綽號は是僭稱せざる義也羅貫中水滸傳を為るに及
 て地煞七十二人を附増して亦綽號を負したる後傳の
 作者この意を知らず呼延鈺徐晟花逢春東安平の數人
 必綽號なくはあるべかりずとこの義に及さずけ
 り是亦前傳作者の意と岩齋したるをしるべきのみ又
 按ずると右の癸辛雜識を著したる周密は字を公謹と
 いひけり宋末の人にて元の國初に至れり當時東江等

三十六人の像贊世に出たればその由来久しきを知る
 べし又清の阮葵生が茶餘客話云世傳水滸傳三十六人
 像亦龔高士筆而明吳承恩為之贊と云へりか、此は周
 密が記載の後明に至りて吳承恩も亦右の像贊の作者
 ならん今この階に傳寫せし水滸傳百八人の画像は
 陳洪綬の筆にて那瑛の序ありしに大贊あるを見ざる
 のみ陳洪綬は明末の人にて當時傳神に名あり清の張
 庚が國朝東嶽錄に陳洪綬の小傳ありその大略を知る
 に足れりとはとまればか、宋江等三十六人の綽號
 は借前傳號に易するの義にして他賦に殊なる好处あり故

存て弔ありとあらす那書を好む人の言にこのこと
 ありしにせしむるにせしむるにせしむるにせしむるに
 一書本真の刻人にせしむるにせしむるにせしむるに
 忘れたり本傳公孫騰か風雲を禱り降りせしにより大
 敵凍死せし段上作者名山藏を引て唐の玄宗の天寶中
 に教律を征伐せし時唐兵四萬人大雪に凍死せしよし
 を録して借用の故事を自注したる作者の意は本傳
 のうへに就きて人の信せんことを怕るゝ故にこゝに
 借用の故事を引てみづから富言なるを明したる他か

唐博に誇るにありす予も亦草紙物語を作ると折々さ
 り用心ありこ水は和漢暗合なり
 上にもいへることと乾隆再刻の重訂本は書肆の仕入
 物なる如く筆工翻人の誤勘からぬはよみ得かたきく
 たり多かりいまだ原本を見ざるものをもをいかにして
 済すやらん心もとなき事にこそある今千萬の一を録
 して校訂容易からせりしを自記すといふ評五十六
 第一回題詞第一代の榮枯得喪を咏したる長編の内中
 に

五代紛争此由衆は從の誤り由は止の字也○功臣杯

なるて殊あつたあらす、那書を好む人の爲にこのこと
 はくさへしつにき、それ前傳には儼然あるを
 本傳に及ばはいかとも、是必あつたきもの也、評五十
 五
 忘れたり、本傳公孫騰か風雲を禱り降りせしにより、大
 敵凍死せし段に、作者名山藏を引く、唐の玄宗の天寶中、
 吐蕃を征伐せし時、唐兵四萬人、大雪に凍死せしよし
 を録して、借用の故事を自注したる、作者の意は本傳
 のうへに就きて人の信せんことを怕る、故にこゝに
 借用の故事を引く、みづから寓言たるを明したる、他か

廣博に誇るにあり、予も亦草紙物語を作ると折々さ
 り用心あり、これれば和漢暗合あり
 上にもいへること、乾隆再刻の重訂本は書肆の仕入
 物たる如く、筆工刷人の誤勘からぬは、よみ得かたき人
 たり多かり、いまた原本を見ざるものをも、いかにして
 済すやらん、心もとなき事にこそあれ、今千萬の一を録
 して、校訂容易からせりしを自記すといふ、評五十六
 第一回題詞、宋一代の榮枯得喪を咏したる、長編の内中
 に
 五代紛争、此由衆は從の誤り、由は止の字也、○功臣杯

杯 中 録 乙 人 入 々 々

他 一 本 傳 十 中 大 十 五 十 事

再考

清の陸謙が水滸百八人の画像には一人別に釐あり予
近日一友人に借贖したるこの外にも存ほありん

洋五五

酒今其權今は釋の誤り權は權也○維王維霸治未剛維
 は維の誤り剛は剛の誤り也○川影各聲建子文川は燭
 也維王常本作雜王又建子文の三字は千古疑の誤り也
 ○見容再悞傷天倫見は豈の誤也○立去逾年改葬蚤去
 は未の誤也○金騰誓約為故草の秦王貶黜尺布詭黜當
 作黜詭當作詭○豎儒信義欲南遷豎は豎の誤也○萬歲
 歲也○丙兩字也○日厚澤當作仁厚澤○比前天巖當天
 の誤也○青苗法行傷國脈節俠僧高梓安石僧は繪圖は
 圖の誤り也原本青苗法行條安石節俠繪圖傷國脈上作
 るを是とす○天中橋上原本作天津橋上左是○首悞章

有范水公接は接范は疎の誤也○曰翰榮曰は内の誤り
 翰は當作翰の元祐來人來は臺の誤也○免成許讞免は
 竟の誤り許は許の誤也讞當作讞○渡九所所は哥の誤
 也○二聖環且去此後日は且去は去此は腦の誤なり○
 蟻生胃曹也○甘心姪膝微臣構甘は甘姪は屈微は微構
 は構の誤也○不可移移也○侍奏雨宮受莫倫奏は奏雨
 は雨字は孝倫は倫の誤也○勢崩離勢は勢離は遺也○
 侍郎侍郎也○耐蟋蟀耐は耐蟋蟀は蟀也○襄陽襄陽也襄
 未歇暮は宴の誤也○典計計は寸の誤也○畢亭畢亭也
 ○就義就は就也○黃冠黃冠なり繞絶此繞は繞の誤也

○呼杜鵑呼は叫鵑は鵑の誤○回首回首也斷如烟也○
有髮白髮也○續舊編續舊編也

見る一し只是一編の題詞中ト誤寫謬刻の多かりこと
かくの如し本文ト至ては今さら枚挙に遑あらずよく
原本をもて校讐訂正の手を遣ふにありや此は博覽強
記英才敏捷の大儒先生といふとも孰か得てこれを讀
むべき唐山は是文字の固といふなると坊賣の利の爲
には恥をしも知らざるや仕入物の唐本には誤字多か
るを常に見ればもあらず甚じきけいと稀也いと嘆息
のあまり首巻の數行を抄出したり好事の癖歎好事の

癖あり評五十七八全

さてもこの愚評は只大略を挙たるのみ是を細しく評
しなれば厚數十頁の紙筆を費すに至るべしそも亦要
なきわやなればかばかりにしてさてやみなき抑唐山
の釋史には必後人の批評あり皇國の草紙物かたり
には今も昔も評せしもの多しををりるこいと味もも
の、いと稀なるゆゑ也なりされば我この筆すや
みも登のかさ藻のたえにに見るやはいと、すく友
かすべし

天保二年辛卯夏肆月十九日

著作堂老翁戲札に

二す

ニリヤ

水滸後傳國字評追考

鄆哥道伏家甚是得罪

愚評に伏家は俺家の省文なるべしと云ひしは臆説

に怨れりた似たり

再按するに伏家は火家の俗字なりし俗語に家伏といふことばあるも伏家といふことは水滸後傳の外に

所見なし新舊二本火家の火は夥と同音にて夥家といふに同じ

便是仲ヶ間内曰人といふ事也水滸傳第五十

七回に孔亮が援兵を東江に求めんとて李立の酒店に威

て梁山泊に到り路を問ふ段に李立道既是東尋東頭領

て梁山泊に到り路を問ふ段に李立道既是東尋東頭領

我這里有分例便叫火家快去とある火家即是なりとる
 を後傳にイを和へて伏家ト作りし也郭哥か伏家其是
 得罪といひしは自分の事トありずはじめ呼延鈺徐晃
 等に蒙汗藥を飲しめし昏倒せせたる仲々間のもの、
 爲に徐晃ト陪話る言葉也火家を伏家ト作りし故ト不
 圖思ひたかへて愚評ト蛇足の辨を做したるこの贅頭
 評は速に削去るべし又家伏は家具といふトあなじ何
 まれかまれば家内の雜具を家伏と言ふ水滸傳第三十家
 火什物とある是なり又金瓶梅第二回武大が弟武松を
 管待す段に金蓮云々便叫迎見收拾了碟盞家伏とある

も同様の事也又職人の道具をも家伏といふ水滸傳第
 五十三回李逵が湯隆に邂逅してその家に到る段に李
 逵着他屋裏都是鐵砧鐵鎚火爐鉗鑿家伏とある是なり
 又雜具詭度の類をも家伏といふ金瓶梅第十四回花子
 虛か花大等ト嗽詠せられて家賊を尸散する段に這花
 大花三花四分了些床帳家伏去とある是なり家伏と
 伏家と紛れ易けれは筆のついでに具トす後傳なる伏
 家は當に火家ト作るべし
 朱仝に子ありとるを後傳に漏せし再評
 水滸傳第五十一回美髯公朱仝が吳用雷橫等誘り此

加徐寧の甲を盗む故の金環の事
 今有子所以能推知知府愛子之心此徐寧有子所以置措
 幾世留傳之甲也といふ事後傳に徐寧呼延灼等
 に子のありしは前傳の趣を倣ふ友から米成に子の友
 きはしかにむこの一條愚評中に追書するに柳遊人
 辛卯六月七日追識

二二二

薩頭陀が木偶を造りて咒咀の邪法を行ふ條の追評
 この事又似たるものあり金瓶梅第十二回金蓮が正門
 慶に愛を失はざらん爲に賊贖子に回背の法術を行は
 する條に賊贖道既ト要ト少人回背用柳木一塊到兩外男
 釘其手下用膠粘其足町ト堪ト在ト由ト白ト才ト是ト一ト二ト三ト四ト五ト六ト七ト八ト九ト十ト十一ト十二ト十三ト十四ト十五ト十六ト十七ト十八ト十九ト二十ト二十一ト二十二ト二十三ト二十四ト二十五ト二十六ト二十七ト二十八ト二十九ト三十ト三十一ト三十二ト三十三ト三十四ト三十五ト三十六ト三十七ト三十八ト三十九ト四十ト四十一ト四十二ト四十三ト四十四ト四十五ト四十六ト四十七ト四十八ト四十九ト五十ト五十一ト五十二ト五十三ト五十四ト五十五ト五十六ト五十七ト五十八ト五十九ト六十ト六十一ト六十二ト六十三ト六十四ト六十五ト六十六ト六十七ト六十八ト六十九ト七十ト七十一ト七十二ト七十三ト七十四ト七十五ト七十六ト七十七ト七十八ト七十九ト八十ト八十一ト八十二ト八十三ト八十四ト八十五ト八十六ト八十七ト八十八ト八十九ト九十ト九十一ト九十二ト九十三ト九十四ト九十五ト九十六ト九十七ト九十八ト九十九ト一百ト

國書刊行會

梁山泊上到りし故に朱公道小弟今蒙呼喚到山滄州知
 府必然行移文書去鄆城縣旋武老之奈何宋江大笑
 道我教長兄放心尊嫂并令郎已取到這里多日了と云れ
 ば朱公に男兒あること分明也と云れ第五十五回時遷
 が徐寧の甲を盗む故の金端が評註に徐寧有子妙前宋
 公直子所以能推知知府愛子之心此徐寧有子所以置措
 幾世留傳之甲也といふるを後傳に徐寧呼延灼等
 に子のありしは前傳の趣を做らざり宋公に子の友
 きはしかたをこの一條愚評中に追書す人の都遊人
 辛卯六月七日追識

二二二

薩頭陀が木偶を造りて咒咀の邪法を行ふ條の追評
 この事又似たるものあり金瓶梅第十二回金蓮が正門
 慶に愛を失はざらん爲に賊瞎子に回背の法術を行は
 ずる故に賊瞎道既モトメ要ヒト小人回背用柳木一塊刻兩外男
 女人形書着娘子與夫注生辰八字用七七四十九根紅線
 扎ナ在一處上用紅紗一片蒙在男子眼中用艾差其心用針
 釘其手下用膠粘其足暗カキに埋在睡の枕頭内又朱砂書符
 一道燒灰暗カキに攪茶内若得夫玉吃了茶到晚夕睡了枕頭
 不過三日自然有驗婦人道這四椿見解云四椿見猶是怎
 的說賊瞎道好教娘子得知用紗蒙眼使夫玉見你一似西

評門中男練符頭怎西

知笑水遷米措等友人

91

在「正文」於字ニ同シニトヨム一シ又字ノ如クアリ
義ニヨム処ニアルナリ

老小休女房ノコトナレトモコニテハ老婆ト小兒ノ
事ニナリ也
の放心は陶山氏ノ水滸傳解ニ譯シテ安堵ノ義ト云へ
り蓋寛放心邊也

施嬌豔用艾塞心使他心受到你用針釘手隨你怎的不是
使他再不敢動手打你用膠粘足者使他再不往那里胡行
婦人所言滿心歡喜當下備了香燭紙馬替婦人燒了紙上已
此北薩頭陀か行ふ所の惡方とよく相似たりと此りの
邪術の行はれし明孝の惡俗想像るに只是作者の寓
言のみなりん也この一條國字評薩頭陀壓勝咒云々の条下ト追書す

Blank grid area with faint bleed-through text.

鬼臉兒

金瓶梅... 鬼臉兒... 此階にてすなるべカコウと同事にて
小兒を権す面かまへ是なり金瓶梅に所云隔牆云々ハ
鬼臉兒はおそろしやなるものなれと牆を隔てさるわ
さをもて權してはこなたへは見えず故に可不把我説
殺といへり説は戲謔の語に異也説は驚く事にて驚か
し懲すよし也便是譬喻にてかたにてなすものこた

い懲すよし也便是譬喻にてかたにてなすものこた

大へ届かぬは、おそろしくは思はぬといふ事也。先ツ
鬼臉児の、ベカコウたる義を、よく解さるれば、こゝろ得
かたかるべし。これらによりても、杜興か面貌のおそろ
しうなりけん、と、いひし愚評の誣さるを知るべし。
この佗なほ、追て評すにき、事くすくおれども、筆硯に
さういとまを得れば、と、に盡さず、折もあらは、又し
るしつけんと、思ふのみ。
辛卯夏六月八日追記

示可の巻

此書吾自筆の原本は、曩に伊勢松坂なる友人小津桂庵
に乞はれて贈り遣し、ぬ其代として桂子、今年備書に課せ
て一本を写させ、ておこしける者是也。この筆工、文盲に
て、切に臨寫したれば、魯魚亥豕の誤寫、先聲に違あらず。
余此とも、今は老眼不明にして、校訂に由なし。この故に、
強て愚媿に讀せ、て其違へるを正すものから、尚聞漏し
て、及はざるも、多かりて、人具眼の者見ることあり、は、又
宜しく是を訂正すべし。

天保十四年癸卯十二月二十五日

七十七翁著作堂重識

有年云第四十六評中赤禪嶋の名を、
より五穀金銀銅鐵絨帛衣裳冠帻
て禪に充男は是も有事なしと
別は自あり家居は木の柱竹の
又垂れて障障に充平常草の類を
大同十異味尤美也二年へ
好と云久居の故に自言語も通
其筵に連子に各自土鍋に
しき唄ものして、
同じ只唄さるのみ暹羅より二三年に一度船来銀小刀

有年云第四十六評中赤禪嶋の名を、
より五穀金銀銅鐵絨帛衣裳冠帻
て禪に充男は是も有事なしと
別は自あり家居は木の柱竹の
又垂れて障障に充平常草の類を
大同十異味尤美也二年へ
好と云久居の故に自言語も通
其筵に連子に各自土鍋に
しき唄ものして、
同じ只嵬さるのみ暹羅より二三年に一度船来銀小刀

と齋し海嶺と交質すと海嶺もらにて射て取より孤嶋
 の情態思やらる其後福建に届るの時某寺江詩史參詣
 の事を許され寺にて雜劇興行すと丙戌八月長崎に届
 るの日有司より種々尋問の事ありべし引と云ふ嶋名
 更に不知但蠻夷の偏嶋故清国には不知也と答たり
 又福建某寺に平常雜劇なし是は漂客對敬の爲に催た
 るらんと答たり此事清人並通事等連印の上書を故有
 て密に見たる事あるを以て暗記の儘を寫して蛇足を
 添こは此許にあつかりぬ事ながら嶋名未詳とあるに
 因て也

入
手
書
卷
之
一